全日本剣道連盟杖道

（解　説）

全日本剣道連盟

剣道の理念

剣道は剣の理法の修錬による人間形成の道である

剣道修錬の心構え

剣道を正しく真剣に学び
心身を錬磨して旺盛なる気力を養い
剣道の特性を通じて礼節をとうとび
信義を重んじ誠を尽して
常に自己の修養に務め
以って国家社会を愛して
広く人類の平和繁栄に
寄与せんとするものである

昭和50年３月20日制定
全日本剣道連盟

剣道指導の心構え

（竹刀の本意）

剣道の正しい伝承と発展のために、剣の理法に基づく竹刀の扱い方の指導に努める。

剣道は、竹刀による「心気力一致」を目指し、自己を創造していく道である。「竹刀という剣」は、相手に向ける剣であると同時に自分に向けられた剣でもある。この修錬を通じて竹刀と心身の一体化を図ることを指導の要点とする。

（礼法）

相手の人格を尊重し、心豊かな人間の育成のために礼法を重んずる指導に努める。

剣道は、勝負の場においても「礼節を尊ぶ」ことを重視する。お互いを敬う心と形（かたち）の礼法指導によって、節度ある生活態度を身につけ、「交剣知愛」の輪を広げていくことを指導の要点とする。

（生涯剣道）

ともに剣道を学び、安全・健康に留意しつつ、生涯にわたる人間形成の道を見出す指導に努める。

剣道は、世代を超えて学び合う道である。「技」を通じて「道」を求め、社会の活力を高めながら、豊かな生命観を育み、文化としての剣道を実践していくことを指導の目標とする。

平成19年３月14日制定
全日本剣道連盟

「全日本剣道連盟杖道」の改訂に当たって

全日本剣道連盟杖道は、昭和43年に制定され、その後35年間にわたり杖道の普及と発展に寄与してきた。その間、昭和52年、昭和62年には一部改正がなされたものの、抜本的な見直し作業は行われなかった。

そのため、特に明記されていない部分を中心に指導者間の指導内容に差異が生じ、審査あるいは試合等の判断に齟齬がみられるようになった。

そこで杖道委員会において、平成13年から約２年間にわたり昭和43年に制定された内容の基本的部分を変更することなく下記の見直し作業を行い、全日本剣道連盟の統一見解として改訂版を作成した。

この解説書が全剣連杖道の適正な指導、公正な審査および試合運営に貢献し、杖道の正しい普及・発展と修錬に役立つことを期待するものである。

記

見直しの主要点

1．指導内容が指導者間で差異を生じさせないために、杖道委員全員による理解の統一を図った。
2．原則的動作の基準の設定と文章表現の整理、統一化を行った。
3．従来表現されていなかった部分も成文化し、理解の統一を図った。
4．成文化されていないにも拘らず、慣例的に用いられていた基本の単独動作についても成文化した。
5．足捌きの図解も含め、解説内容の徹底を図るため、指導上の留意点を付した。
6．日本剣道形等との整合性を考慮した。

以　上

平成15年４月１日

財団法人　全日本剣道連盟
会　長　武 安 義 光

「全日本剣道連盟杖道」の一部追加・修正に当たって

平成20年に第２版を発行してから８年が経過し、この間における諸動作の変更・訂正・追加、また文言の解釈等は、杖道委員会の統一事項として、中央・地区講習会に於いて、その都度伝達し、指導してきたところです。

現在、世界各国に杖道愛好者が増え、普及発展している現状であります。

平成27年３月より昭和43年に制定された内容を変えることなく、一部「追加・修正」等の作業委員会を約２年間にわたり行いました。これは、これからの全日本剣道連盟杖道の統一見解とし、指導、技術等のテキスト修正版として作成したものです。

この解説書が全剣連杖道の適正な指導、公正な審査および試合運営に貢献し、杖道の正しい普及・発展と修錬に役立つことを期待するものであります。

記

1,　杖道委員会の統一事項を追加した。
2,　動作における文章の文言を統一した。
3,　指導上の留意点、足の図解を修正した。
4,　太刀は、日本剣道形等と整合性を考慮した。

以　上

平成29年４月１日

一般財団法人　全日本剣道連盟
副会長兼専務理事　福 本 修 二

目　　次

1　杖道の特徴 …… 1

（1）用具の規格 …… 1

ア　杖の規格 …… 1

イ　太刀（木刀）の規格 …… 1

（2）杖道の指導精神 …… 2

（3）杖道を学ぶ目的とその効果 …… 2

2　礼　法 …… 3

（1）座　礼 …… 3

（2）立　礼 …… 3

3　全日本剣道連盟杖道 …… 5

（1）杖道の姿勢 …… 5

ア　立　杖 …… 5

イ　提　杖 …… 5

（2）杖の構え方 …… 5

ア　常の構え …… 5

イ　本手の構え …… 5

（ア）　右本手の構え …… 5

（イ）　左本手の構え …… 7

ウ　逆手の構え …… 7

（ア）　右逆手の構え …… 7

（イ）　左逆手の構え …… 7

エ　引落の構え …… 7
（ア）右引落の構え …… 7
（イ）左引落の構え …… 9
（3）太刀の構え方および解き方 …… 9
ア　提刀姿勢 …… 9
イ　携刀姿勢 …… 9
ウ　帯刀姿勢 …… 9
エ　太刀の構え方 …… 11
（ア）中段の構え …… 11
（イ）諸手左上段の構え …… 11
（ウ）諸手右上段の構え …… 11
（エ）下段の構え …… 11
（オ）八相の構え …… 11
（カ）脇構え …… 13
オ　構えの解き方 …… 13
（4）仕打交代 …… 13
（5）基　本 …… 15
ア　本手打 …… 19
イ　逆手打 …… 25
ウ　引落打 …… 29
エ　返し突 …… 35

オ　逆手突 …… 41
カ　巻　落 …… 45
キ　繰　付 …… 49
ク　繰　放 …… 55
ケ　体　当 …… 61
コ　突外打 …… 67
サ　胴払打 …… 73
シ　体外打 …… 77
（6）形 …… 87
ア　一本目　着　杖 …… 87
イ　二本目　水　月 …… 91
ウ　三本目　引　提 …… 93
エ　四本目　斜　面 …… 97
オ　五本目　左　貫 …… 99
カ　六本目　物　見 …… 101
キ　七本目　霞 …… 103
ク　八本目　太刀落 …… 107
ケ　九本目　雷　打 …… 111
コ　十本目　正　眼 …… 113
サ　十一本目　乱　留 …… 115
シ　十二本目　乱　合 …… 119

1　杖道の特徴

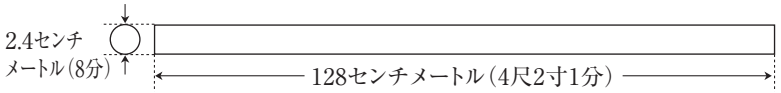
（1）用具の規格

杖道は杖を武器とする武道であって、使用する杖および太刀（木刀）の規格は次のとおりとする。

ア　杖の規格

長さ　　128センチメートル（4尺2寸1分）
　　以下センチという
直径　　2.4センチ（8分）
材質　　白樫
形状　　下図を原則とする。

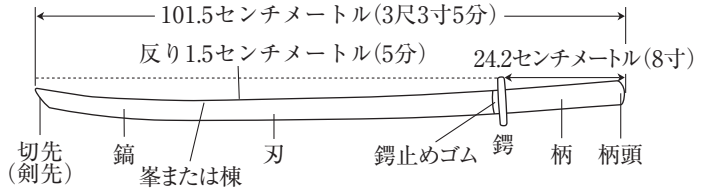
杖



イ　太刀（木刀）の規格

長さ（全長）　　101.5センチ（3尺3寸5分）
柄の長さ　　24.2センチ（8寸）
材質　　白樫（鍔は革製）
形状　　下図を原則とする。

太刀（木刀）



（2）杖道の指導精神

杖道は攻撃を主とせず、相手の攻撃に応じて変化し制圧するのが本旨であって、その指導精神は

傷つけず　人をこらして戒しむる
教えは杖の外にやはある

という古歌にあるとおり、形の多くは後の先で始まる。

（3）杖道を学ぶ目的とその効果

杖道は精神の修養と身体の鍛錬を第一義とする。決して手足の技ではなく心の技で、その目的は精神修養にある。

杖道修錬の効果は数多いが、主として次の５点をあげることができる。

1　礼儀、信義、誠実、忍耐等の精神が養われる。
2　身体を強健にし、活動を敏活にする。
3　姿勢態度がよくなる。
4　判断力、決断力が養われ、自信をもって事に当たれるようになる。
5　対人関係がよくなり、社会生活に必要な協調性が養われる。

2　礼　法

（1）座　礼

座礼は道場中央下座で約３歩の距離で向い合って正座し、太刀（打）は鍔を右膝頭の線に揃え、刃を内側にして、杖（仕）は杖の中心部を右体側中央に拳ひと握り離して置き、姿勢を正し、おもむろに両手を同時に膝の前に八字形に上体をまげて行い、礼が終ったらおもむろに両手を元に復する。

（2）立　礼

上座の立礼は約30度、相互の立礼は約15度で相手に注目して行う。

打は太刀を右手提刀、仕は立杖または提杖で行う。

◎　太刀と杖を同時に保持する所作について。

刃を上に太刀を内側、杖を外側にし、杖先・柄頭を揃え、左手で下から鍔元を杖とともに持ち、右手を上腰にとり、やや前下がりに抱える。

正座は「左座右起」

左足を約半歩退き、左膝、右膝の順について座る

右足、左足の順で立ち上がる。

3　全日本剣道連盟杖道

（1）杖道の姿勢

ア　立杖

要領　自然体で立ったまま右腕を自然に下げ、杖を軽く握り、右手首を右体側につけ、杖尾を右足小指の外側約５センチの位置において立てる。

イ　提杖

要領　自然体のまま杖を右手で握り、杖先を下に向け、杖尾を右後肩につけ、親指を体側につける。

（2）杖の構え方

一本目　　常の構え
二本目　　本手の構え（右・左）
三本目　　逆手の構え（右・左）
四本目　　引落の構え（右・左）

ア　常の構え

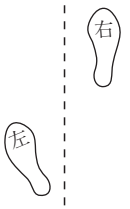
要領　自然体のまま右手で杖の中央を握り、右体側に軽くつけ、杖先をほぼ「へそ」の高さにし、両足を揃えて立つ。

イ　本手の構え

（ア）右本手の構え

要領　常の構えから、右手、右足を前に出し、左手で杖尾を握り、右手をすべらせて、全長のほぼ４分の１の手幅にとり、杖先を相手の目の高さにし、「やや半身」となって構える。

「揃える」とは、かかとを接した起立姿勢ではなく、両足幅を約１足開いた自然体の立姿をいう



「やや半身」
左も右に準ずる。

（イ）左本手の構え

要領　常の構えから、左手で右手の前で杖を握り、左手と左足を前に出すと同時に右手で杖尾を握り、左手をすべらせて、全長のほぼ４分の１の手幅にとり、杖先を相手の目の高さにして、「やや半身」となって構える。

ウ　逆手の構え

（ア）右逆手の構え

要領　常の構えから、杖先を左手で逆に握り、右足を１歩踏み出すと同時に、右手は持ち替えることなく、杖尾を右後ろ上から回して前に出しつつ、右手をすべらせて、全長のほぼ４分の１の手幅にとり、杖先を相手の目の高さにし、「やや半身」となって構える。

（イ）左逆手の構え

要領　いったん右逆手に構えてから、左手を引いて杖を両手いっぱいにとり、左足を出すと同時に杖を左後ろ上から回して前に出しつつ、左手をすべらせて、全長のほぼ４分の１の手幅にとり、杖先を相手の目の高さとし、「やや半身」となって構える。

エ　引落の構え

（ア）右引落の構え

要領　常の構えから、左足を前に出すと同時に杖先に左手をかけ、左手親指の付け根を左乳部に軽くつけ、四指を揃えて上に伸ばし「真半身」となり、右手を順に持ち替え、杖を下から握る。

「真半身」
左も右に準ずる。

（イ）左引落の構え

要領　右本手の構えから、左親指をはずし、左手掌を返しながら杖を後ろ下に引落とし、右手を持ち替えて右乳部に右手親指の付け根を軽くつけ、四指を揃えて上に伸ばし真半身に構える。

（3）太刀の構え方および解き方

ア　提刀（さげとう）姿勢

太刀を右手に、刃を上にして鍔元付近をかるく握り（親指は鍔にかけない）、自然に下げ、踵はかるくつける。

イ　携刀（けいとう）姿勢

左手の親指を鍔にかけて四指で鍔元付近を握り、肘をわずかに曲げて、刃を上に、「柄頭」が正中線上、切っ先が約45度後ろ下がりになるようにして、左親指の付け根を腰骨の上に軽くつけて太刀を携える。

ウ　帯刀（たいとう）姿勢

・携刀姿勢から帯刀する時

携刀姿勢から、太刀をわずかに前に送り、右手掌を上にして親指を鍔にかけ、右手で柄を前に押し出しながら、左手を剣先近くに送り、左手で分けた帯の間に剣先を差し入れた後、柄頭が正中線上にくるように帯びる。

・構えを解いた姿勢から帯刀する時

構えを解いた姿勢から、左手を柄から外して腹部にとり、右手で刃を上に柄を返しながら剣先を腹部の左手に送り、左手で分けた帯の間に剣先を差し入れ右足を左足に引き付け親指を鍔にかけ、柄頭が正中線上にくるように帯びる。

杖道において、「太刀」とは通常「木刀」のことを指す。木刀といえども真剣と考え、取り扱い上は常に刀と同様に扱うことが求められる。

「太刀の持ち替え方」は、概ね体の中央で行う。

エ　太刀の構え方

（ア）中段の構え

右足を前に、左拳はへそ前より約ひと握り前にして、左手親指の付け根の関節をへその高さにする。

剣先の延長は、両眼の中央または左目とする。

（一足一刀の間合を前提とする）

（イ）諸手左上段の構え

中段の構えから左足を前に出し、左拳を左額の前上約ひと握りのところとし、剣先は約45度後ろ上方に向け、やや右に寄せる。

（ウ）諸手右上段の構え

中段の構えから左拳を額の前上約ひと握りのところとし、剣先は約45度上方に向け、正中線上とする。

（エ）下段の構え

中段の構えから、そのまま剣先を相手の膝頭より約３～６センチ下とする。

（オ）八相の構え

中段の構えから左足を出し、太刀を大きく諸手左上段に振りかぶる気持ちで構え、刃先は相手に向ける。

諸手左上段の構えから、そのまま右拳を右肩のあたりまで下ろした形で、太刀をとる位置は鍔を口の高さにし、口から約ひと握り離す。

左拳の位置はほぼ正中線上とし、刀身の傾きは後ろ上方約45度とする。

右足先はやや外側に向け、かかとが床に着かないように注意する。

携刀の姿勢から中段の構えになる時は、左斜め上から抜き、極端に振りかぶらないようにする。

上段に振りかぶってから、八相の構えに移行するのではない。

（カ）脇構え

中段から右足を後ろに退きながら、太刀を右拳がおおむね口の高さを通るくらいに大きく右脇にとり、左半身となる。

右足先はやや外側に向け、かかとが床に着かないように注意する。

剣先は後ろに、刃先は右斜め下に向け、特に刀身が相手から見えないようにする。

左拳は、「へそ」の右斜め下約ひと握りのところにおく。この時、左手首は曲げない。

剣先は下段の構えより少し下げた位置にとる。

オ　構えの解き方

剣先を下げる要領は、自然に相手の左膝頭から約３～６センチ下、下段の構え程度に右斜め下に下げる。この時、剣先は、上から見て相手の体からわずかに外れるくらいにひらき、刃先は左斜め下に向ける。

（４）仕打交代

「仕」と「打」が交代する場合は、次の要領で行う。

１　「仕」は常の構え、「打」は提刀姿勢で互いに開始線中央に進んで向かい合う。

２　「仕」杖、「打」太刀を立てて差し出す。

３　両者同時に手を伸ばして相手が持っている位置の下をとって、杖と太刀を交換する。（取換え後、「仕」と「打」は逆になる）

４　「打」は左へ半歩開きながら体前で左手の上を右手に持ち替え刃を上に返して提刀姿勢となる。

「仕」は体前で左手の上を握って、杖を右手に持ち替え、左へ半歩開きつつ、手を下ろして常の構えとなる。

５　両者同時に直進し、線上で右回りして相互に正対する。

刃先を左斜め下に向ける時、掌中で柄を動かさず、自然に柄を握ったまま手首を返す。

構えを解く際、右足を左足にひきよせる時、または左足を右足の後に退く時は、両足を揃えず、右足は左足のやや前になるように立つ。

（5）基　本

名　称

一本目	本手打（ほんてうち）	（右・左）
二本目	逆手打（ぎゃくてうち）	（右・左）
三本目	引落打（ひきおとしうち）	（右・左）
四本目	返し突（かえしづき）	（右・左）
五本目	逆手突（ぎゃくてづき）	
六本目	巻　落（まきおとし）	
七本目	繰　付（くりつけ）	
八本目	繰　放（くりはなし）	
九本目	体　当（たいあたり）	
十本目	突外打（つきはずしうち）	
十一本目	胴払打（どうばらいうち）	
十二本目	体外打（たいはずしうち）	（右・左）

基本は前記の12本あり、杖の操法の基礎となるものであって、これを修得することによって杖道形が自由かつ円滑に行われるようになるものである。

1　正しい姿勢と気位を高める。
2　間合がわかり、打突が確実となる。
3　動作が正確、機敏、活発となる。
4　個癖がなくなり、打筋が正しくなる。
5　目付け、眼が明らかとなり、気合が充実してくる。

（注）

・基本技には相対動作と単独動作の２種がある。本解説書では相対動作、単独動作の順に記述する。
・杖道の気合は、「打」太刀の気合は「エイッ」「仕」杖

基本は、杖道形の杖の遣い方の原則を示したもので、基本の組み合わせが形になっているのではない。したがって基本の稽古は、形を自由かつ円滑に遣えるようにするために行うことを念頭において稽古する。

便宜上、団体で一緒に演武し、また連続して稽古をしているが、各動作を大切にし、姿勢、打突に、十分気をつけて行う。特に単独動作では、気、杖、体が一致するよう心がけて、正しい動作を身につけるよう稽古する。

解　　説

の気合は打ち込む時は「エイッ」突く時は「ホオッ」と力強く腹から発声する。

指　導　上　の　留　意　点

解　　説

ア　本手打（号令－「相互に礼」「本手に構え」「本手打用意」「始め」「やめ」「もとへ」「位置交代」）

目的　本手打は、本手の構えから杖をいっぱいにとり、本手にて「打」の顔面を打つ技である。

本手打には、右本手打と左本手打の２種があり、左右交互に行う。

要領

「相互に礼」

仕・打　間合をとって提杖、提刀となり、ともに立礼をする。礼の後、「打」は携刀、「仕」は常の構えとなる。

「本手に構え」

打　中段に構える。

仕　右本手に構える。

「本手打　用意」

打　構えを解く。

仕　右本手の構えから左手の親指をはずし手を返しながら、杖を後ろに引いて両手いっぱいにとる。

「始め」

仕　左手を後ろからすべらしながら上に回して左足を踏み出すと同時に顔面を打つ。

打　打たれる瞬間、左足から１歩後退する。さらに左足から退いて下から中段に構えて杖に合わせる。

打　構えを解く。

仕　右手の親指を外し手を返しながら、杖を後ろに引いて両手いっぱいにとり、右手を後ろからすべらしながら上に回して、右足を踏み出すと同時に顔面

指　導　上　の　留　意　点

仕・打　間合は、「仕」「打」ともに右足を出して構えた時、剣先と杖先を等分（10センチ程度 以下同じ）に合わせることの出来る距離とする。

仕　太刀と杖を合わせる時、太刀に合わせる高さは咽喉とし、延長は顔面につけ、等分に合わせる。深く合わせてから退かない。

仕　やや半身の構えとなり、杖先を「打」の顔面につけ、顔面から外れぬように左手を返しながら後ろに引く。顔面とは両眼の間とする。

両手いっぱいにとった時、杖の中心が体の中央にくるようにする。後ろの手は返して小指で杖を握る。

仕　原則として前足から進まず、後ろ足から踏み出す。打つと同時に右手の親指を握り、左本手の構えとなる。

仕　１本１本「本手打　用意」の姿勢をとる。

を打つ。

打　打たれる瞬間、左足から１歩後退する。

（この動作を繰り返し、連続して本手打を行う）

「やめ」

仕　本手の構えのまま残心を示す。

打　左足から退いて下から中段に構えて杖に合わせる。

「もとへ」

打　右足を左足にわずかにひきよせ構えを解く。（以下これに準ずる）

仕　右本手で終った場合、「打」が構えを解くのに合わせて、杖先が「打」の顔面から外れぬように、右手で杖の中心を握り左足を右足に揃え、常の構えとなる。

左本手で終った場合、右手を引いて、杖をいっぱいにとり、右手で杖の中心を握り右足を左足に揃え、常の構えとなる。

以下、巻落までこれに準ずる。

「位置交代」

双方左に半歩開き、直進し右回りで正対する。

以下、これに準ずる。

仕・打　ともに呼吸を合わせて動くようにする。

単独動作（号令－「本手に構え」「本手打　用意」「始め」「やめ」「もとへ」「回れ右」）

要領

「本手に構え」
　常の構えから右本手に構える。
「本手打　用意」
　左手の親指を外し手を返しながら、杖を後ろに引いて両手いっぱいにとる。
「始め」
　左手を後ろからすべらしながら上に回して、左足を踏み出すと同時に顔面を打つ。
　右手の親指を外し手を返しながら、杖を後ろに引いて両手いっぱいにとる。
　右手を後ろからすべらしながら上に回して、右足を踏み出すと同時に顔面を打つ。
（この動作を繰り返し、連続して本手打を行う）
「やめ」
　右あるいは左本手の構えのまま止まる。
「もとへ」
　常の構えとなる。
「回れ右」
　提杖にして、回れ右をし常の構えとなる。
　以下、これに準ずる

　単独動作の場合は、特に前足から進まず後ろ足から踏み出すように留意する。
　１本ずつ用意の姿勢をしっかりとる。また毎回打ち終った構えの姿勢を確認する。特に後ろ足の向きと位置に留意する。

解　　説

イ　逆手打（号令－「逆手に構え」「逆手打　用意」「始め」「やめ」「もとへ」「位置交代」）

目的　逆手打は、逆手の構えから杖をいっぱいにとり、逆手にて「打」の左右横面を打つ技である。単独動作では、本手打と同様、逆手にて上から顔面を打つ。

逆手打には、右逆手打、左逆手打の２種があり、左右交互に行う。

要領

「逆手に構え」
- 打　中段に構える。
- 仕　右逆手に構える。

「逆手打　用意」
- 仕　左手を後ろに引いて、杖を両手いっぱいにとる。

「始め」
- 仕　左手を後ろからすべらしながら上に回して、左足を踏み出すと同時に右横面を打つ。
- 打　打たれる瞬間、右足を１歩後退し、太刀を立てて杖を受け止める。
- 仕　右手を後ろに引き、杖を両手いっぱいにとり、右手を後ろからすべらしながら上に回して、右足を踏み出すと同時に左横面を打つ。
- 打　打たれる瞬間、左足を１歩後退し、太刀を立てて杖を受け止める。

（この動作を繰り返し、連続して逆手打を行う）

「やめ」
- 仕　逆手の構えから本手に持ち替えて残心を示す。
- 打　左足から退いて、そのまま中段に構えて合わせる。

指　導　上　の　留　意　点

「物打」　太刀の刀身の中で最もよく切れる部位のことで切っ先から約10センチぐらいのところをいう。

杖の場合は、最も力が有効に作用する部位で杖先から約16センチぐらいのところをいう。

- 仕　やや半身の構えとなり、杖先を「打」の顔面につけ、顔面から外れぬように左手を後ろに引く。
- 仕　「打」の横面を上から打つ。
- 打　杖を受け止める時、やや半身となり正面で杖を受ける。
- 仕　両手いっぱいにとった時、杖の中心が体の中央にくるようにする。

原則として前足から進まず、後ろ足から踏み出す。手首は常に真っ直ぐにして、打つと同時に逆手の構えとなる。

- 仕　１本１本「逆手打　用意」の姿勢をとる。
- 仕・打　ともに呼吸を合わせて動くようにする。

解　　説

単独動作（号令－「逆手に構え」「逆手打　用意」「始め」「やめ」「もとへ」「回れ右」）

要領

「逆手に構え」
　常の構えから右逆手に構える。
「逆手打　用意」
　左手を後ろに引いて、杖を両手いっぱいにとる。
「始め」
　左手を後ろからすべらしながら上に回して、左足を踏み出すと同時に顔面を打つ。
　右手を後ろに引き、杖を両手いっぱいにとる。
　右手を後ろからすべらしながら上に回して、右足を踏み出すと同時に顔面を打つ。
（この動作を繰り返し、連続して逆手打を行う）
「やめ」
　右あるいは左逆手の構えで止まり、本手の構えとなる。
「もとへ」
　常の構えとなる。

指　導　上　の　留　意　点

　単独動作の場合は、特に前足から進まず後ろ足から踏み出すように留意する。
　１本ずつ用意の姿勢をしっかりとる。また毎回打ち終った構えの姿勢を確認する。特に後ろ足の向きと位置に留意する。

ウ　引落打（号令－「引落に構え」「引落打　始め」「やめ」「もとへ」「位置交代」）

目的　引落打は、引落の構えから「打」の顔面を打つ、あるいは太刀を打ち落とし顔面を攻める技である。相対動作では、中段に構えた太刀を引落打し顔面を攻め、単独動作では、直接本手にて顔面を打ち、左右交互に行う。

要領

「引落に構え」

打　中段に構える。

仕　右引落に構える。

「引落打　始め」

仕　右手を後ろから上に回してすべらしながら、太刀を右斜め上から打ち落としつつ、右足を１歩踏み出して、「打」の顔面を攻めて残心を示す。

打　太刀を右後方に打ち落とされると同時に右足から退く。

仕　左手親指を外し手を返しながら杖を左後ろ下に引き落とし、真半身になり、右手の掌を外側に向け持ち替えて右乳部に軽くつけ、左引落の構えとなる。

打　左足を退きながら気合をかけて切り付けるように、太刀を上から中段に構える。

仕　左手を後ろから上に回してすべらしながら、太刀を左斜め上から打ち落としつつ、左足を１歩踏み出して、「打」の顔面を攻めて残心を示す。

打　太刀を左後方に打ち落とされると同時に左足から退

仕　真半身の構えになり、肩、腰、かかとを一直線とし体をねじらない。

仕　胸を前に向けず、身体に添わせた杖を後ろから上に上げ、腰を捻りながら太刀を打ち落とす。
一拍子で行うと同時に右足を１歩踏み出す。
原則として左足から進んで打たないようにする。

打　後ろにさがり過ぎない。

仕　引き落とす時、「打」を注視しながら真半身となり、「打」に胸や背を見せない。
前足はやや斜め前に向け膝は内股にならないように軽く前に曲げ、後ろ足は自然に伸ばし親指の線を腰の線と直角とする。

打　太刀を頭上に振りかぶる時、剣先は水平より下げない。
間合に十分気をつける。

く。
（この動作を繰り返し、連続して引落打を行う）
「やめ」
仕　本手の構えのまま残心を示す。
打　左足から退いて下から中段に構えて杖に合わせる。

解　　説

単独動作（号令－「引落に構え」「引落打　始め」
「やめ」「もとへ」「回れ右」）

要領

「引落に構え」
　常の構えから右引落に構える。
「引落打　始め」
　右手を後ろから上に回してすべらしながら、右足を踏み出すと同時に顔面を打つ。
　左手親指を外し手を返しながら杖を左後ろ下に引落とし、真半身となり、右手の掌を外側に向け持ち替えて右乳部に軽くつけ、左引落の構えとなる。
　左手を後ろから上に回してすべらしながら、左足を踏み出すと同時に顔面を打つ。
　右手親指を外し手を返しながら杖を右後下に引落し、真半身となり、左手の掌を外側に向け持ち替えて左乳部に軽くつけ、右引落の構えとなる。
　右手を後ろから上に回してすべらしながら、右足を踏み出すと同時に顔面を打つ。
（この動作を繰り返し、連続して引落打を行う）
「やめ」
　右あるいは左本手の構えのまま止まる。
「もとへ」
　常の構えにもどる。

指　導　上　の　留　意　点

　単独動作の場合は、特に前足から進まず後ろ足から踏み出すように留意する。
　胸を前に向けず、身体に添わせた杖を後ろから上に回して顔面を打つ。
　引落に構える時、前を注視しながら真半身となる。
　前足はやや斜め前に向け膝は内股にならないように軽く前に曲げ、後ろ足は自然に伸ばし親指の線を腰の線と直角とする。

　真半身の引落の構え、打ち終った時のやや半身の本手の構え、用意の時の真半身の引落の構え、打ち終った時のやや半身の本手の構えを、ひとつずつ足腰を動かし正確な姿勢をとり、１本１本引落打を行う。

エ　返し突（号令－「本手に構え」「返し突　用意」「始め」「やめ」「もとへ」「位置交代」）

目的　水月を突く技で、腰を十分捻り、杖先と杖尾を交互に返して突く技である。左右の返し突を交互に行う。

要領

「本手に構え」

打　中段に構える。

仕　右本手に構える。

「返し突　用意」

打　中段から右足を退いて左上段に構える。

仕　右本手の構えから、左手の親指を外しながら、腰を十分に捻り、両足を交差し、右手をすべらして上から後ろに返し、杖を両手いっぱいにとり、杖先を水月につける。

「始め」

仕　左足を１歩大きく踏み出しながら右手で杖を真っ直ぐに突き出して「打」の水月を突く。さらに杖先を顔面につけて残心を示す。

打　左足を退き中段に構える。
さらに中段から右足を退いて左上段に構える。

仕　右手の親指を外しながら、腰を十分に捻り、両足を交差し、左手をすべらして上から後ろに返し、杖を両手いっぱいにとり、杖先を水月につける。さらに右足を１歩大きく踏み出しながら左手で杖を真っ直ぐに突き出して「打」の水月を突く。
さらに杖先を顔面につける。

打　左足を退き中段に構える。

打　　間合を遠くとり過ぎず一足一刀の間合に退く。左足から退かない。

仕　　杖を返す時、腰を十分捻り両足の向きを変える。
前傾姿勢にならないよう重心は両足のほぼ中心に、杖先は水平よりわずかに上げ、杖の中心はへそあたりに、後ろの右手は突き手にする。
返す時に左手を上下に動かさず､真っ直ぐ前に出す。

打　　中段に構える時、気合をかけ、切り付けるように構える。

解　　説

（この動作を繰り返し、返し突を連続して行う）

「やめ」

仕　本手の構えのまま残心を示す。

打　左足から退いて上から中段に構えて杖に合わせる。

指　導　上　の　留　意　点

解　　説

単独動作（号令―「本手に構え」「返し突　用意」「始め」「やめ」「もとへ」「回れ右」）

要領

「本手に構え」
　常の構えから右本手に構える。

「返し突　用意」
　左手の親指を外しながら、腰を十分に捻り両足を交差し、右手をすべらせて上から後ろに返し、杖を両手いっぱいにとり、杖先は水平よりわずかに上げる。

「始め」
　左足を１歩大きく踏み出しながら右手で杖を真っ直ぐに突き出して水月を突く。
　右手の親指を外しながら、腰を十分に捻り両足を交差し、左手をすべらせて上から後ろに返し、杖を両手いっぱいにとり、杖先を水平よりわずかに上げる。
　右足を１歩大きく踏み出しながら左手で杖を真っ直ぐに突き出して水月を突く。
（この動作を繰り返し、連続して返し突を行う）

「やめ」
　杖先を顔面につけ、右あるいは左本手となる。

「もとへ」
　常の構えとなる。

指　導　上　の　留　意　点

１本ずつ用意の姿勢をしっかりとる。また毎回突き終った構えの姿勢を確認する。特に後ろ足の向きと位置に留意する。

オ　逆手突（号令－「本手に構え」「逆手突　用意」「始め」「やめ」「もとへ」「位置交代」）

目的　杖を逆手に持って、相手の水月を上から突き、さらに右本手打で顔面を打つ技で、突きと打ちの動作を連続して行う技である。

要領

「本手に構え」
打　中段に構える。
仕　右本手に構える。

「逆手突　用意」
打　中段から右足を退いて左上段となる。
仕　右本手の構えから、右手をすべらして頭上後方に上げながら、腰を十分に捻り両足を交差し、逆手のまま左手をほぼ肩の高さとし、杖を両手いっぱいにとり杖先を水月につける。

「始め」
仕　左足を踏み出すと同時に、頭上から右手で杖を真っ直ぐに突き出して水月を突く。さらに右手を頭上後方に上げ、杖を両手いっぱいにとり、右手をすべらし右足を踏み出すと同時に、右本手打にて顔面を打つ。
打　左足から大きく退きながら、相打ちの要領で切り結ぶ。
（この動作を繰り返し、逆手突と右本手打を交互に連続して行う）

「やめ」
仕　本手の構えのまま残心を示す。
打　左足からわずかに退いてそのまま中段に構えて杖に合わせる。

打　間合を遠くとり過ぎず一足一刀の間合に退く。左足からは退かない。
仕　杖を上げる時、腰を十分捻り両足の向きを変える。
左手は、ほぼ肩の高さとし、杖の延長が水月となるようにする。

仕　上から真っ直ぐに水月を突き、右手は前額部の前上方とする。杖先が上がる突き方はしない。
突き終った姿勢はやや半身となる。肘は柔らかくし、両手の小指は締める。
再度真半身となり杖を頭上にとる。
打　気合をかけて切り結ぶ。間合が深すぎる時は、さらに後ろ足から退いて合わせる。

解　　説

単独動作（号令－「本手に構え」「逆手突　用意」「始め」「やめ」「もとへ」「回れ右」）

要領

「本手に構え」
　常の構えから右本手に構える。
「逆手突　用意」
　右手をすべらして頭上後方に上げながら、腰を十分に捻り両足を交差し、逆手のまま左手をほぼ肩の高さとし、杖を両手いっぱいにとり杖先を水月につける。
「始め」
　左足を踏み出すと同時に、頭上から右手で杖を真っ直ぐ突き出して水月を突く。
　右手を頭上後方に上げ、杖を両手いっぱいにとる。
　右手をすべらし右足を出すと同時に、右本手打にて顔面を打つ。
（この動作を繰り返し、逆手突と右本手打を交互に連続して行う）
「やめ」
　右本手の構えのまま止まる。
「もとへ」
　常の構えとなる。

指　導　上　の　留　意　点

　１本ずつ用意の姿勢をしっかりとる。また毎回突き終った構えの姿勢を確認する。特に後ろ足の向きと位置に留意する。

カ　巻　落（号令－「本手に構え」「巻落　用意」「始め」「やめ」「もとへ」「位置交代」）

目的　正面を切り付ける太刀を受けた瞬間、太刀を巻き落とし、顔面を攻める技である。

要領

「本手に構え」

打　中段に構える。

仕　右本手に構える。

「巻落　用意」

打　右足から進み両手を伸ばし正面を切り付けた状態となる。

仕　左手を左肩の高さに上げ、右手を左前額部の左前方に出し、杖先を右斜め上に上げる。左手は手の甲が内側、右手は手の甲が外側となる。

「始め」

仕　太刀を左斜め前下方に半円を描くようにして大きく巻き落としつつ、右足を踏み出すと同時に、顔面を攻め残心を示す。

打　剣先を右後方に巻き落とされると同時に、右足を退く。次いで左足を退きながら太刀を後ろ上方から振りかぶり「仕」の正面を切り付ける。

（この動作を繰り返し、巻落を連続して行う）

「やめ」

仕　本手の構えのまま残心を示す。

打　左足から退いて下からそのまま中段に構えて杖に合わせる。

打　間合をとって合わせ、「仕」の右手を切れる位置で合わせない。

仕　両手首は、自然に真っ直ぐにし、巻きこんだり、反らしたりしない。

やや半身の姿勢のまま杖を上げる。左肘は張らずに脇に付ける。

仕　手を前に伸ばして巻かない。

打　左足を退いて切り付けて間合が遠くなる時は、足を踏み替えて切り付けても良い。ただし、近すぎてはいけない。

「仕」は、前に出て受けとめてはならない。

単独動作（号令―「本手に構え」「巻落　用意」「始め」「やめ」「もとへ」「回れ右」）

要領

「本手に構え」
　常の構えから右本手に構える。

「巻落　用意」
　左手を左肩の高さに上げ、右手を左前額部の左前方に出し杖先を右斜め上に上げる。左手は手の甲が内側、右手は手の甲が外側となる。

「始め」
　左斜め前下方に半円を描くようにして大きく巻落としつつ、右足を踏み出し顔面を攻める。
（この動作を繰り返し、連続して巻落を行う）

「やめ」
　右本手の構えのまま止まる。

「もとへ」
　常の構えとなる。

太刀が杖のどの部分にあるのか意識して杖を上げる。

１本ずつ用意の姿勢をしっかりとる。また毎回顔面を攻め終った構えの姿勢を確認する。特に後ろ足の向きと位置に留意する。

キ　繰　付（号令－「繰付　用意」「始め」「やめ」「もとへ」「位置交代」）

目的　太刀で正面に切り付けてくるのを、体を左にかわし、杖先で中柄を下からすくい、すかさず太刀を下腹部に繰り付ける技である。

繰付は左右の繰付があるが、基本動作では右繰付のみとする。

要領

「繰付　用意」

打　八相に構える。

仕　常の構えのまま。

「始め」

打　八相から、太刀を振りかぶりながら「仕」の正面を切り付ける。

仕　常の構えから、左足を１歩左横に開き左手で杖先を逆手にとり、右足を左足の右斜め前に踏み出すと同時に両手を肩幅にして頭上に上げ、太刀の中柄を下からすくう。

さらに、杖を自分の体前に大きく円を描いて杖先で「打」の下腹部に繰り付けながら、右足から１歩「打」の方向に踏み出す。

打　右足から退きながら繰り付けられた後、さらに右、左、右足と退き「仕」の正面で八相となる。

仕　右手を本手に変えながら、左足を動かし、右本手の構えとなり、杖先を「打」の顔面につけ残心を示す。さらに、左足を右足に揃え常の構えとなる。

中柄を下からすくいとは、切ってくる太刀を打ち止めることである。（切り止めた太刀を後からすくうのではない）

仕　「両手を肩幅にして、頭上に上げ」の部分について（頭上４分、杖先６分とする。以下これに準ずる）

打　八相から振りかぶりながら切り付ける動作は、一拍子とする。太刀を頭上に振りかぶった時、剣先を水平より下げない。

仕　杖先ほぼ16センチのところで「打」の中柄をすくう。右足は「打」の右足の線の外側に位置する。

頭上の杖の線、両手首の線、肘の線、肩の線、腰の線、両かかとの線は、一直線となし、ねじれないようにする。杖先は「打」の目の高さとする。

繰付けた時、左手は左脚の付け根に、両足は「打」の方向に進み、「打」の両足と一直線に並ぶ。上体を真っ直ぐにし、「打」を注視し、姿勢を崩さない。

打　繰り付けられる時、正確な技には、抵抗せずに「仕」の技に任せつつ、姿勢が崩れないように足腰を動かす。また太刀を床に強く打ち付けないように、手、腕を柔らかく使う。

（この動作を繰り返し、連続して繰付を行う）

「やめ」

打　繰り付けられた姿勢から右、左、右、左足と退き、正対して剣先を「仕」の左膝下につける。

仕　右手を本手に変えながら、左足を動かし、右本手の構えとなり、杖先を「打」の顔面につけ残心を示す。

「もとへ」

打　右足を左足にわずかにひきよせ構えを解く。

仕　左足を右足に揃え、常の構えとなる。

解　　説

単独動作（号令―「繰付　用意」「始め」
「やめ」「もとへ」「回れ右」）

要領

「繰付　用意」
常の構えから、左足を１歩左横に開き左手で杖先を逆手にとり、右足を左足の右斜め前に踏み出すと同時に両手を肩幅にして杖を頭上に上げる。

「始め」
杖を自分の体前に大きく円を描いて繰り付けながら、１歩右斜め前に踏み出す。
再度右足から左斜め前に半歩進み、「繰付　用意」の姿勢となる。
（この動作を繰り返し、連続して繰付を行う）

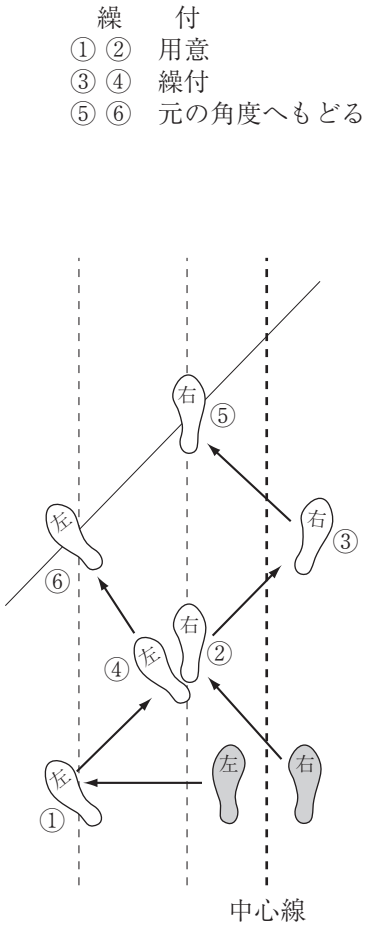
「やめ」
右手を本手に変えながら左足を動かし、右本手に構える。

「もとへ」
常の構えとなる。

指　導　上　の　留　意　点

杖を頭上に上げた時、繰付けた時、ともに腰の高さは一定にし、上下させない。

１本ずつ「繰付　用意」の姿勢と繰り付けた姿勢が、太刀の中柄に対し真半身となっていることを確認する。



ク　繰　放（号令—「繰放　用意」「始め」「やめ」「もとへ」「位置交代」）

目的　太刀で正面に切り付けてくるのを、体を左にかわし、杖先で中柄を下からすくい、すかさず前方に繰放す技である。

要領

「繰放　用意」

打　八相に構える。

仕　常の構えのまま。

「始め」

打　八相から、太刀を振りかぶりながら「仕」の正面を切り付ける。

仕　常の構えから、左足を１歩左横に開き左手で杖先を逆手にとり、右足を左足の右斜め前に踏み出すと同時に両手を肩幅にして頭上に上げ、太刀の中柄を下からすくう。

さらに右足を「打」の右側に大きく踏み出すと同時に、杖先を太刀の柄につけたまま大きい円を描き、「打」の後方に繰り放す。繰り放した後、杖先は「打」の目につける。

打　繰り放されたら相手を注視したまま右、左、右足と後退して八相となる。

仕　右手を本手に変えながら、右本手の構えとなり、杖先を「打」の顔面につけたまま残心を示す。さらに、右足を右に寄せながら、左足を右足に揃え、「打」の正面で常の構えとなる。

（この動作を繰り返し、連続して繰放を行う）

「やめ」

打　繰り放されたら右、左、右、左足と退き、正対して

打　　正確に切り付ける。

仕　　正しい姿勢で、正確に中柄をすくう。右足は、「打」の右足の線の外側に位置する。

繰り放す時、左右の手首を真っ直ぐのままにする。

ただ押し放つのではなく、杖の先を回して繰放す。

繰り放した時、後ろ足を横に向けず、やや半身の逆手の構えとなる。

打　　繰り放されたら、右足を後ろに退き、左足をその右足の前に組むように退き、さらに右足を退く。

剣先を「仕」の左膝下につける。

仕　右手を本手に変えながら右本手の構えとなり、杖先を「打」の顔面につけたまま残心を示す。

「もとへ」

打　右足を左足にわずかにひきよせ構えを解く。

仕　右足を右に寄せながら左足を右足に揃え、「打」の正面で常の構えとなる。

解　　説

単独動作（号令―「繰放　用意」「始め」
「やめ」「もとへ」「回れ右」）

要領

「繰放　用意」
常の構えから、左足を１歩左横に開き左手で杖先を逆手にとり、右足を左足の右斜め前に踏み出すと同時に両手を肩幅にして杖を頭上に上げる。

「始め」
杖先で大きく円を描き、右足を前に大きく踏み出すと同時に繰り放し、杖先を目の高さにする。
再度右足から前に半歩進み、「繰放　用意」の姿勢となる。
（この動作を繰り返し、連続して繰放を行う）

「やめ」
右手を本手に変えながら右本手に構える。

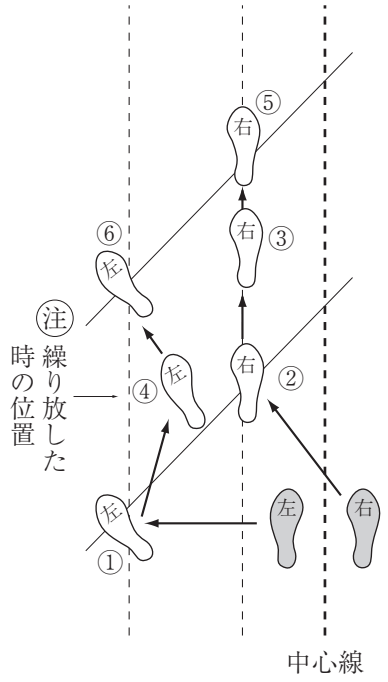
「もとへ」
右足を右に寄せながら左足も右足に揃えて、最初の中心線にもどり常の構えとなる。

指　導　上　の　留　意　点

繰　　放
①②　用意
③④　繰放
⑤⑥　元の角度へもどる

杖先で大きな円を描く時、杖先を後方に回さない。太刀の中柄を想定して繰り放し杖先を目の高さにする。繰り放した時は、後ろ足を横に向けず、やや半身の逆手の構えとなる。

１本ずつ「繰放　用意」の姿勢が太刀の中柄に対し真半身に、また繰り放した姿勢が逆手の構えとなっていることを確認する。



ケ　体　当（号令－「体当　用意」「始め」「やめ」「もとへ」「位置交代」）

目的　太刀で正面に切り付けてくるのを、体を左にかわし、杖先で中柄を下からすくい、すかさず左拳を水月に、右拳を顔面にとり、体当たりする技である。

要領

「体当　用意」

打　八相に構える。

仕　常の構えのまま。

「始め」

打　八相から、太刀を振りかぶりながら「仕」の正面を切り付ける。

仕　常の構えから、左足を１歩左横に開き左手で杖先を逆手にとり、右足を左足の右斜め前に踏み出すと同時に両手を肩幅にして頭上に上げ、太刀の中柄を下からすくう。

さらに、杖先を中柄につけたまま下から押し上げるようにして左拳を水月に、右拳を顔面につけながら杖を立てると同時に、右足から半歩右斜めに踏み出し「打」の正面に立つ。

打　中柄を押し上げられた時、右足を左足にわずかにひきよせ、両手を軽く伸ばし、剣先を右に、柄を真横にして頭上にとる。

仕　両肘を伸ばしたまま１歩進み体当たりする。

打　左足から交互に小さく４歩退き八相となる。

仕　右手を本手に変えながら右本手の構えとなり、杖先を「打」の顔面につけたまま残心を示す。さらに左足を右足に揃え、常の構えとなる。

（この動作を繰り返し、連続して体当を行う）

打　　正確に切り付ける。

仕　　正しい姿勢で、正確に中柄をすくう。右足は「打」の右足の線の外側に位置する。

杖先で中柄を押し上げ、「打」をくずす時、杖と中柄の接点をずらさないように使う。

後ろ足を引き付けすぎない。また、つま先を横に向けず、前に向ける。

打　　中柄を押し上げられた時、両足を揃えず肘と膝を柔らかくして、体当たりに備える。

仕　　体当たりをする時は、両腕を柔らかく伸ばしたまま、体ごと前に進める。

解　　説

「やめ」

打　体当たりされたら左、右、左、右足と退き、さらに左足を退いて太刀を下ろし、正対して剣先を「仕」の左膝下につける。

仕　右手を本手に変えながら右本手の構えとなり、杖先を「打」の顔面につけたまま残心を示す。

「もとへ」

打　右足を左足に、わずかにひきよせ構えを解く。

仕　左足を右足に揃えて、常の構えとなる。

指　導　上　の　留　意　点

解　　説

単独動作（号令―「体当　用意」「始め」
「やめ」「もとへ」「回れ右」）

要領

「体当　用意」

常の構えから、左足を１歩左横に開き左手で杖先を逆手にとり、右足を左足の右斜め前に踏み出すと同時に両手を肩幅にして杖を頭上に上げる。

「始め」

杖先を下から押し上げるようにして、左拳を水月の高さに、右拳を顔面の高さにしながら杖を立てると同時に、右足から半歩右斜め前に踏み出し、両手を伸ばしたまま大きく１歩進み体当たりをする。

再度右足から左斜め前に半歩進み、「体当　用意」の姿勢となる。

（この動作を繰り返し、連続して体当を行う）

「やめ」

右手を本手に変えながら右本手に構える。

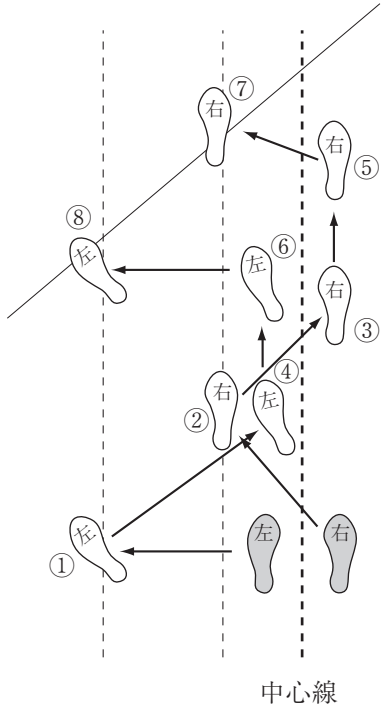
「もとへ」

常の構えとなる。

指　導　上　の　留　意　点

体　　当
①②　用意
③④　すり上げ
⑤⑥　体当
⑦⑧　元の角度へもどる

１本ずつ「体当　用意」の姿勢が太刀の中柄に対し真半身に、また太刀を押し上げた姿勢、体当たりした姿勢を確認する。特に後ろ足に注意。



コ　突外打（号令—「突外打　用意」「始め」「やめ」「もとへ」「位置交代」）

目的　太刀で水月を突いてくるのを、左足から退きながら剣先を受け流し、すかさず太刀を打ち落として顔面を攻める技である。

要領

「突外打　用意」

打　八相に構える。

仕　常の構えから杖先を左横にし、左逆手で握り、杖を頭上に両手いっぱいにとる。

「始め」

打　八相から、「仕」の顔面を制しながら太刀を左腰にとり、右足を進め真っ直ぐに水月を突く。

仕　左足から退き、体を捌きながら真半身となり、同時に左手を頭上後ろに、杖先は下方に、両手を肩幅にとりながら剣先を受け流す。
さらに左手を放し、右手を右肩上に上げながら正面を向き、左手で杖先を握り、右本手にて太刀を打ち落としつつ右足を踏み出して顔面を攻める。

打　太刀を打ち落とされ、攻められて右足を後ろに退く。

仕　さらに右足から１歩進んで右本手のまま顔面を攻める。

打　攻められて左足を後ろに退く。
さらに左足からさがりながら中段に構える。

仕　左足を右足に揃え、杖を頭上に両手いっぱいにとる。

打　中段から水月を突く。

（この動作を繰り返して、連続して突外打を行う）

仕　頭上とは額の真上であって、額の前方ではない。

打　太刀の刃は、左腰にとった時は左斜め下にし、一瞬止まり剣先は「仕」の水月につける。突く時は太刀の刃を真下にする。

仕　突いてくる剣先を注視することなく「打」の全体を真っ直ぐに見る。腰を後ろに引くことなく真半身となる。
右手の握りの位置は変えず、そのまま右肩上に上げ、左手は正中線上に置く。

仕　１歩、１歩正確に進む。

打　十分に間合をとる。

仕　右手をすべらせて、杖をいっぱいにとり、杖先で右手を持ち替える。

解　　説

「やめ」
　仕　右本手の構えのまま杖先を顔面につけ残心を示す。
　打　左足から退いて下から中段に構えて杖に合わせる。
「もとへ」
　打　右足を左足にわずかにひきよせ構えを解く。
　仕　左足を右足に揃え、常の構えとなる。

指　導　上　の　留　意　点

解　　説

単独動作（号令―「突外打　用意」「始め」
「やめ」「もとへ」「回れ右」）

要領

「突外打　用意」
常の構えから杖先を左横にし、左逆手で握り、杖を頭上に両手いっぱいにとる。

「始め」
左足から退き、体を捌きながら真半身となり、同時に左手は頭上後ろに、杖先は下方へその高さあたりに、両手を肩幅にとる。
左手を放し、右手を右肩上に上げ、左手で杖先を握る。
右本手にて太刀を打ち落としつつ、右足を踏み出して顔面を攻める。
さらに右足から１歩進んで右本手のまま顔面を攻める。
左足を右足に揃え、右手をすべらせて杖を両手いっぱいに頭上に取り右手を持ち替える。
（この動作を繰り返し、連続して突外打を行う）

「やめ」
右本手の構えのまま止まる。

「もとへ」
常の構えとなる。

指　導　上　の　留　意　点

前方を注視し、打太刀を想定しつつ、杖先を自分の中心よりわずかに左にとる。

サ　胴払打（号令－「本手に構え」「胴払打　始め」「やめ」「もとへ」）

目的　太刀で胴に切り付けてくるのを、右足を１歩退いて太刀を受け止め、さらに打ち落として顔面を攻める技である。

要領

「本手に構え」
　打　中段に構える。
　仕　右本手に構える。
「胴払打　始め」
　打　逆八相から、右足を１歩踏み込んで「仕」の右胴を切る。
　仕　左手の親指を外し、右手を右斜め上に上げて伸ばし杖を両手いっぱいにとりながら、右足を１歩退いて左手をすべらして両手をほぼ肩幅とし、両肘を伸ばして杖先が斜め下を向くようにして真半身となって太刀を受け止める。
　　さらに、右手を上に上げ杖を両手いっぱいにとり、腰を捻り右本手にて太刀を上から打ち落とす。
　打　太刀を打ち落とされて､右足をわずかにひきよせる。
　仕　右足を大きく踏み出して右本手にて顔面を攻め、残心を示す。
　打　右足､左足と後ろに退いて中段となり杖に合わせる。
（この動作を繰り返して、連続して胴払打を行う）
「やめ」
「もとへ」
　打　右足を左足にわずかにひきよせ、構えを解く。
　仕　左足を右足に揃え、常の構えとなる。

打　　刃筋をしっかりと立て、剣先が下がらぬよう胴に切り付ける。

仕　　左手を左または後ろに引くことなく、右手をすべらせて杖をいっぱいにとりながら、同時に左手をすべらして両手を肩幅とする。一拍子で行う。

仕　　受け止めた太刀を真下に打ち落とすが､その時「打」を注視しながら、腰を安定させて打ち込む。

単独動作（号令―「本手に構え」「胴払打　始め」
「やめ」「もとへ」）

要領

「本手に構え」
　常の構えから右本手に構える。
「胴払打　始め」
　左手の親指を外し、右手を右斜め上に上げて伸ばし両手いっぱいにとりながら、右足を１歩退いて左手をすべらして両手をほぼ肩幅とし、杖先をほぼ左膝の高さにし、真半身となる。その時杖と身体は平行とする。
　右手を上に上げ杖を両手いっぱいにとり、腰を捻り右本手にて太刀を上から打ち落とす。さらに右足を踏み出して、顔面を攻める。
（この動作を繰り返し、連続して胴払打を行う）
「やめ」
　右本手の構えのまま止まる。
「もとへ」
　常の構えとなる。

　下や横を見ないで、前方を注視しながら体を捌く。
　右斜め前下方に太刀があることを想定すること。また打ち落とした時は腰を安定させ体が前に流れないようにする。

シ　体外打

目的　太刀で正面に切り付けてくるのを、体を後ろに退いて外し、すかさず太刀を打ち落とす技である。
体外打には、右体外打と左体外打がある。
単独動作では顔面を打つ。

・右体外打（号令―「本手に構え」「体外打　用意」「始め」「やめ」「もとへ」「位置交代」）

要領

「本手に構え」
打　中段に構える。
仕　右本手に構える。

「体外打　用意」
打　中段から左足を１歩進めて八相に構える。
仕　右本手の構えから、左手を後ろに引き杖を両手いっぱいにとり、さらに右手を右膝上につけ、左手は左に伸ばし左肩の高さにとる。

「始め」
打　八相から太刀を振りかぶりながら「仕」の正面を切り付ける。
仕　右足を左足に揃え左腕を頭上にとり、杖を右体側に下げ、右手は甲を内側にして下に伸ばしたまま体を直立して外す。
さらに、右手をすべらして杖を後ろ上から回して、太刀を右本手で打ち落とし左足から１歩大きく退き、振りきった杖で右本手の構えとなり、「打」の顔面につけ残心を示す。
打　打たれた太刀を、両足を動かさず腰、足を捻って右体側に打ち落とされる。

打　　切り付けた剣先は、咽喉の高さで止める。

仕　　頭上とは額の真上であり、額の前方ではない。
杖を下げた時、右手の甲を外側に向けない。

仕　　右肩を柔らかくし、右手を後ろからすべらして回しつつ左手にて杖を下まで振りきって、目の高さにもどす。振りきった後は、大きく退いて間合をとる。

さらに、左足を１歩進めて前から八相に構える。
（この動作を繰り返し、連続して右体外打を行う）
「やめ」
仕　右本手の構えのまま、杖先を顔面に付けて残心を示す。
打　左足から退いて中段に構えて杖に合わせる。
「もとへ」
打　右足を左足にわずかにひきよせ構えを解く。
仕　左足を右足に揃え常の構えとなる。

・左体外打（号令―「左本手に構え」「左体外打　用意」「始め」「やめ」「もとへ」「太刀は納め」「相互に礼」）

要領

「左本手に構え」
打　中段に構える。
仕　左本手に構える。
「左体外打　用意」
打　中段から左足を１歩進めて八相に構える。
仕　左本手の構えから、右手を後ろに引き杖を両手いっぱいにとり、さらに左手を左膝上につけ、右手は右に伸ばし右肩の高さにとる。
「始め」
打　八相から太刀を振りかぶりながら「仕」の正面を切り付ける。
仕　左足を右足に揃え右腕を頭上にとり、杖を左体側に下げ、左手は甲を内側にして下に伸ばしたまま体を直立して外す。
さらに、左手をすべらして杖を後ろから回して、太刀を左本手で打ち落とし右足から１歩大きく退き、振りきった杖で左本手の構えとなり、「打」の顔面

打　　切り付けた剣先は、咽喉の高さで止める。

仕　　頭上とは額の真上であり、額の前方ではない。
杖を下げた時、左手の甲を外側に向けない。

仕　　左肩を柔らかくし、左手を後ろからすべらして回しつつ右手にて杖を下まで振りきって、目の高さにもどす。振りきった後は、大きく退いて間合をとる。

につけ残心を示す。

打　打たれた太刀を、両足を動かさず腰、足を捻って左体側に打ち落とされる。

さらに、左足を１歩進めて前から八相に構える。

（この動作を繰り返し、連続して左体外打を行う）

「やめ」

仕　左本手の構えのまま､杖先を顔面につけ残心を示す。

打　左足から退いて中段に構えて杖に合わせる。

「もとへ」

打　右足を左足にわずかにひきよせ、構えを解く。

仕　右足を左足に揃え、常の構えとなる。

「太刀は納め」

打　右足を左足に引き付けると同時に太刀を納め、携刀となる。

「相互に礼」

仕・打　提杖、提刀となり、ともに立礼をする。

単独動作

・右体外打（号令―「本手に構え」「体外打　用意」
「始め」「やめ」「もとへ」「回れ右」）

要領

「本手に構え」
　常の構えから右本手に構える。
「体外打　用意」
　左手を後ろに引き杖を両手いっぱいにとり、さらに右手を右膝上につけ、左手は左に伸ばし左肩の高さにとる。
「始め」
　右足を左足に揃え左腕を頭上にとり、杖を右体側に下げ、右手は甲を内側にして下に伸ばす。
　さらに杖を後ろから回して顔面を打ちながら、左足を退く。
（この動作を繰り返し、連続して右体外打を行う）
「やめ」
　右本手の構えのまま止まる。
「もとへ」
　常の構えとなる。

・左体外打（号令―「左本手に構え」「左体外打　用意」
「始め」「やめ」「もとへ」）

要領

「左本手に構え」
　常の構えから左本手に構える。
「左体外打　用意」
　右手を後ろに引き杖を両手いっぱいにとり、さらに左手を左膝上につけ、右手は右に伸ばし右肩の高さにとる。
「始め」
　左足を右足に揃え右腕を頭上にとり、杖を左体側に下げ、

左手は甲を内側にして下に伸ばす。
さらに杖を後ろから回して顔面を打ちながら、右足を退く。
（この動作を繰り返し、連続して左体外打を行う）
「やめ」
左本手の構えのまま止まる。
「もとへ」
常の構えとなる。

（6）　形

名　称
一本目　　着　杖（つきづえ）
二本目　　水　月（すいげつ）
三本目　　引　提（ひっさげ）
四本目　　斜　面（しゃめん）
五本目　　左　貫（さかん）
六本目　　物　見（ものみ）
七本目　　霞　　（かすみ）
八本目　　太刀落（たちおとし）
九本目　　雷　打（らいうち）
十本目　　正　眼（せいがん）
十一本目　　乱　留（みだれどめ）
十二本目　　乱　合（らんあい）

ア　一本目　着　杖

目的　　正面から切り下ろす太刀を、体を右斜め後ろにかわして左小手を打ち、さらに、退きながら上段に構えるその左小手を本手打する形である。

要領

仕　常の構えから右手を正面に伸ばし、すべらして、杖尾を床につけて立て、杖先を握る。

打　携刀から右足を出し中段に構え、左足を出し八相に構える。
八相に構えて間合に進み、振りかぶりながら右足を踏み込み正面を水平まで切り下ろす。

形実施上の留意点
◎開始および終了時の礼法
開始時
仕・打　　両者開始線に足を揃えて立ち、「打」は右手提刀「仕」は提杖になり、立礼の要領で相互に礼を行う。

終了時
仕・打　　両者開始線までもどり、「打」は足を揃えて携刀し、さらに右手提刀とする。「仕」は常の構えから提杖となり、双方立礼の要領にて相互に礼を行う。

◎団体指導における号令のかけ方
号令　「相互に礼」「一本目　着杖」「用意」「始め」
（以下これに準ずる）
「やめ」「太刀は納め」「相互に礼」

◎形における、各技の開始時「打・仕」の動作
「打」携刀の姿勢から柄に手をかけた時、又は構えを解いた姿勢から中段に構える為に剣先が動いた時「仕」はそれぞれの構えに動く。「打」は中段の構えで待ち、「仕」が構えたら八相に構える。（以下これに準ずる）

仕　　右手を縮めずに、杖を真っ直ぐ立てる。

打　　左足から進んで、一足一刀の間合で止まり（以下これに準ずる）、太刀が頭部に届くように、しっかり両手を伸ばして切る。
八相から振りかぶりながら切り下ろす動作は、一拍子とする。太刀を頭上に振りかぶった時、剣先を水平より下げない。（以下これに準ずる）

解　　説

仕　右足から右斜め後ろに大きく退きながら体をかわし、右手を持ち替え腰にとり、左手で杖を握る。杖先を右に半円を描くように回すと同時に、左足から踏み出して左本手で左小手を打つ。

打　右足から退きながら左上段に構える。

仕　杖を両手いっぱいにとり、右足を踏み出し、左小手を本手打する。

打　右足から退きながら太刀を右脇下に下ろす。

仕　杖先を顔面につけて残心を示す。

納　め　方

仕　左手を後ろに引き、杖を両手いっぱいにとり、左手を肩の高さにし右手を右膝上につける。

打　左足を右足の後に退き構えを解く。

仕　右手を上から持ち替え、杖を右手の内にすべらせながら左足を右足に揃え、常の構えとなる。

（注）「仕」「打」ともに元の位置にもどる。以下これに準ずる。

指　導　上　の　留　意　点

仕　　杖を振りかぶることなく、大きく半円を描き、手を伸ばし顔面を攻めるようにして、小手を打つ。

体を捌いた時の姿勢は、真半身となり、小手を打った姿勢はやや半身となる。

打　　左足から退かない。「仕」を１歩踏み込んで切ることが出来る間合と姿勢をとる。

仕　　「打」が上段にとると同時に、杖を両手いっぱいにとり、杖先は「打」の顔面につける。

打　　太刀は剣先の方向に下ろす。両足が自由に動けるように残心を示し、重心と姿勢に気をつける。（以下これに準ずる）

仕　　「打」の顔面とは、両眼の間とする。

仕　　右手の甲が右足に接し、左手の甲が正面に向くようにする。

打　　右足を動かさず左足を右足の後ろに退き構えを解く。（以下これに準ずる）

仕　　「打」が構えを解くのに合せて、常の構えとなる。（以下これに準ずる）

イ　二本目　水　月

目的　太刀で正面を切りかかるところを、右斜め前に体をかわして水月を突き、さらに引落打する形である。

要領

打　八相に構えて間合に進み、振りかぶりながら右足を踏み込み正面を切る。
仕　常の構えから右足を右斜め前に踏み出し、左足をわずかに移動させて体をかわしながら左手は腰にとり、右手は杖の中央を握ったままで水月を突く。
打　右足から大きく退きながら八相に構える。
仕　右足から後ろに退くと同時に杖を右後ろに引き、左手を杖先にかけ、右手を持ち替え引落に構える。
打　右足から踏み込み切り付けるように中段に構える。
仕　太刀を引落打すると同時に、右足から踏み出し「打」の顔面を攻める。
打　太刀を右後方に打ち落とされると同時に右足から退く。
仕　残心を示す。

納　め　方　　一本目と同じ。

打　　切る太刀は、突きを感じた時に止める。
　　左手がほぼ胸の高さ。
仕　　「打」が振りかぶり切りかかるところを突く。右手は、突っ張らず、縮めず。左足の位置は、ほぼ右足の線上とする。
打　　一足一刀で切り付けることができる間合に退く。
仕　　二足一刀の間合に退く。

ウ　三本目　引　提

目的　太刀で正面に切り付けてくるのを、体を右にかわして、繰り付け、さらに水月を突き、顔面を引落打する形である。

要領

仕　常の構えから右足を退き、杖先を下にし、右後ろ体側に立てて真半身になり、杖を逆手で握ったまま正面を見る。
打　八相に構えて間合に進み、中段に構える。
仕　腰を捻りながら杖先を顔面につけ、左手を添え逆手のまま杖を前に出しながら右足を左足に揃え、さらに左足を退きながら右逆手に構えて太刀と合わせる。

打　左足を踏み出して左上段となる。
仕　左足から退いて左逆手引落に構える。
打　右足を踏み込んで正面を切り付ける。
仕　右足を右に開き、左足を右足の左斜め前に踏み出し、杖先で太刀の中柄をすくい、繰付の要領で「打」の下腹部に太刀を繰り付ける。
打　左足から退き真半身となり繰り付けられた後、左足から左横に退き、さらに正面に向きながら右、左足と退く。
仕　左手を本手に持ち替え、左足から踏み出して水月を突き、さらに引落打で顔面を打つ。
打　打たれる瞬間左足から１歩退く。
仕　残心を示す。

仕　「仕」はひとつひとつの動作に、真半身とやや半身の姿勢をしっかりととること。
構え（真半身）→逆手の構え（やや半身）→逆手引落の構え（真半身）→中柄を下からすくった姿勢（中柄に対して真半身）→繰付（真半身）→突き用意（真半身）→突き（やや半身）→引落の構え（真半身）→本手の構え（やや半身）

仕　杖を握った右手首は、捻りながら手の甲を大腿部に向け、肩の中央とくるぶしの線に杖を立てる。
左手は自然に伸ばし体側につける。

仕　「打」が間合に入る時､腰を捻り杖先を顔面につける。
太刀と杖を合わせる時、太刀に合わせる高さは咽喉とし、延長は顔面につけ、等分に合わせる。深く合わせてから退かない。
打　杖が退くことを予期して左足を踏み出さない。

仕　開く右足の位置は､引落の構えの頭の位置の右横とし、左足は太刀の中柄と右足の間に踏み出す。その時左足は､「打」の左足の外側となる。
繰付のあと「仕」と「打」の両足は一直線となる。

打　両足が自由に動けるように残心を示し、重心と姿勢に気をつける。（以下これに準ずる）

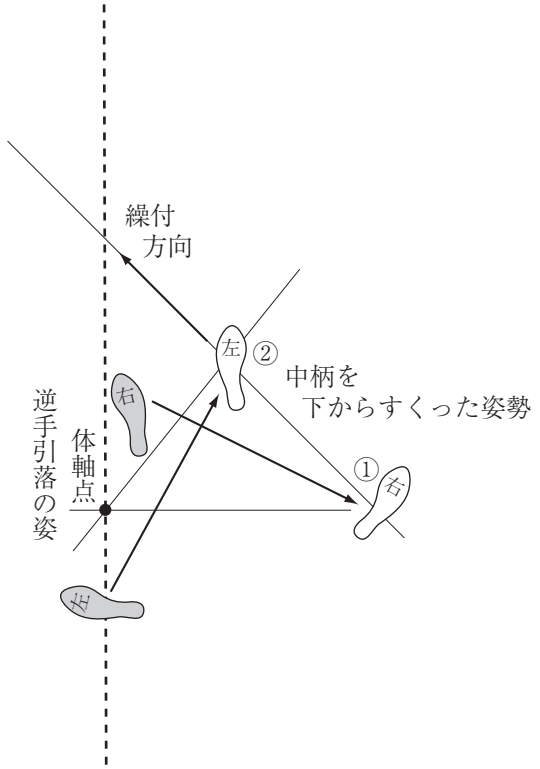
納　め　方

仕　一本目と同じ。

打　右足を左足にわずかにひきよせ構えを解く。

打　　左足を動かさず右足をわずかにひきよせ構えを解く。
（以下これに準ずる）

三本目「引提」
繰付動作の原則



エ　四本目　斜　面

目的　正面から切り下ろす太刀を、右斜め前に体をかわしてこめかみを逆手打し、さらに返し突きする形である。

要領

打　八相に構えて間合に進み、振りかぶりながら右足を踏み込み正面を水平まで切り下ろす。

仕　常の構えから左手で杖先を逆に握り右足を右斜め前に踏み出し、左足を移動させて体をかわしながら、右斜め下から逆手で左こめかみを打つ。

打　右足から大きく退きながら左上段となる。

仕　腰を捻って返し突の姿勢となり、左足から踏み出して水月を突く。さらに杖先を顔面につけ残心を示す。

打　右足から退きながら太刀を右脇に下ろす。

納　め　方

仕　右手を後ろに引き、杖を両手いっぱいにとり、右手を肩の高さにし左手を左膝上につける。

打　左足を右足の後に退き、構えを解く。

仕　左手を上から持ち替え、右手親指を外し、右手を上から前に回しながら右足を左足に揃え、常の構えとなる。

打　太刀が頭部に届くように、しっかり両手を伸ばして切る。

仕　「打」が振りかぶる時､杖先に手を掛ける。打った時､左手はへその前、右手はすべらせて手幅をほぼ４分の１とする。杖先は最短距離を通りこめかみの位置。

打　左足から退かない。一足一刀の間合をとる。

仕　「打」が上段にとると同時に､「返し突　用意」の姿勢となり、杖先の延長を水月につける。

仕　左手の甲が左足に接し、右手の甲が正面に向くようにする。

オ　五本目　左　貫

目的　太刀で水月を突いてくるのを、体を退きながら杖で受け流し、突外打の要領で、太刀を打ち、さらに引落打する形である。

要領

仕　常の構えから杖先を左横にし、左手で杖先を逆手で握り、頭上に上げながら、右手をすべらし両手いっぱいにとる。

打　八相に構えて間合に進み、左足を前に出すと同時に剣先で顔面を制するように太刀を大きく八相から左腰にとり、さらに右足を踏み込み水月を突く。

仕　突外打の要領で、左足から退き、真半身となるとともに、剣先を受け流し、ついで左手を放して右手を右肩上に上げながら正面を向き、左手で杖先を握り、右本手で太刀を打ち落としつつ、右足から１歩踏み出し顔面を攻める。

打　太刀を打ち落とされ、顔面を攻められて右足を退く。

仕　さらに右足から１歩攻める。

打　攻められて左足を退く。さらに大きく右足から退きながら八相に構える。

仕　左足を右足に揃え、右足を退くと同時に右手を上から後ろに回して右引落に構える。

打　右足から踏み込み切り付けるように中段に構える。

仕　太刀を引落打すると同時に、右足から踏み出し「打」の顔面を攻める。

打　太刀を右後方に打ち落とされると同時に右足から退く。

仕　残心を示す。

納　め　方　　一本目と同じ。

仕　　頭上に上げるというのは、額の真上に上げることである。

打　　左腰にとった時、一瞬止まり、太刀の刃は左斜め下となり、刃を真っ直ぐ下にして突く。

仕　　太刀を注視することなく、「打」を真っ直ぐ見ながら、体を中心線上に退いて捌きながら真半身となり、剣先を受け流し間合をとる。

打　　二足一刀の間合に退く。

仕　　杖はいっぱいにとって引落とす。

カ　六本目　物　見

目的　　正面から切り下ろす太刀を、体を左にかわし右小手を左本手打し、さらに、返し突きする形である。

要領

仕　常の構えから杖先を左横に向けて、左手で杖を下方から握り右手を杖尾にすべらせて握り、左手を放して杖先を床につけ相手を注視する。

打　八相に構えて間合に進み、振りかぶりながら右足を踏み込み正面を水平まで切り下ろす。

仕　左手で杖を肩幅にとると同時に左足を左斜め後ろに半歩退き、右足を１歩退きながら体をかわし、左手を後ろ上から回し、左本手打で右小手を打つ。

打　右足から退き、左上段に構える。

仕　腰を捻って返し突の姿勢となり、右足から踏み出して水月を突く。さらに杖先を顔面につけ、残心を示す。

打　右足から退きながら太刀を右脇に下ろす。

納　め　方　　一本目と同じ。

仕　　右手は自然に体の前に下げた位置とする。

仕　　「打」が振りかぶる時、右手で杖先を上げ、左手で杖を肩幅にとると同時に左足のつま先を開きながら半歩退き、やや半身の姿勢となり杖先で顔面を攻めるように杖を後ろから回してやや半身の姿勢に体を開いて小手を打つ。

仕　　「打」が上段にとると同時に、「返し突　用意」の姿勢となり、杖先の延長を水月につける。左手は、親指を内側に入れ、突き手となる。

キ　七本目　霞

目的　太刀で正面に切り付けてくるのを体を左にかわして体当たりし、さらに右にかわして繰り付け退くところを水月を突き、顔面を引落打する形である。

要領

仕　常の構えから左手で杖先を逆に握り、右足を退きながら右手を前額部にとり、霞の構えとなる。
打　八相に構えて間合に進み、中段に構える。

仕　右足を左足に揃え、さらに左足を退いて杖を前に下ろし右逆手の構えとなり太刀に合わせる。
ついで左手を引き杖を両手いっぱいにとり、太刀を逆手打ちすると同時に、左足を踏み出して顔面を攻める。
打　太刀を左脇下に打たれると同時に、左足から退き、さらに右足から退いて八相に構える。
仕　右足から退いて右逆手引落に構える。
打　左、右足と踏み込んで正面に切り付ける。

仕　左足を左に開き、右足を左足の右斜め前に踏み出し、杖先で太刀の中柄をすくい、さらに体当たりの要領で右足から「打」の正面に進み、太刀を押し上げる。
打　右足を左足にわずかにひきよせ、太刀を横にして頭上にとる。
仕　右足から踏み出し、体当たりする。
打　体当たりされたら左足から小さく４歩退きながら八相に構える。
仕　左足から退き、左逆手引落の構えとなる。
打　左、右足と踏み込んで正面に切り付ける。

仕　「霞の構え」は原則として真半身である。左肘は体側につけ、左拳は肘より少し上とする。右肘は横に張らずに落とす。右手は手首を曲げず、四指を揃えて伸ばし前額部に置く。
仕　太刀と杖を合わせる時、太刀に合わせる高さは咽喉とし、延長は顔面につけ等分に合わせる。深く合わせてから退かない。太刀を注視しながら高い位置で合わせない。
仕　逆手打し顔面を攻めた時は、左逆手の構えとなる。
打　右足から退く時、一足一刀の間合に退き八相に構える。

仕　二足一刀の間合に退く。
打　左足、右足と踏み込み、正確に太刀の物打で正面を切り付ける。
仕・打　体当たりする時、体当たりを受ける時、双方両足を揃えず寄りかかることなく、膝を柔らかく備える。

打　小さく４歩退く時、一足一刀の間合に退き、八相に構える。
仕　二足一刀の間合に退く。
打　左足、右足と踏み込み、正確に太刀の物打で正面を切り付ける。

解　　説

仕　右足を右に開き、左足を右足の左斜め前に踏み出し、杖先で太刀の中柄をすくい、繰付の要領で「打」の下腹部に太刀を繰り付ける。

打　左足から退き真半身となり繰り付けられた後、左足から左横に退き、さらに正面を向きながら、右、左足と退く。

仕　左手を本手に持ち替え、左足から踏み出して水月を突き、さらに引落打で顔面を打つ。

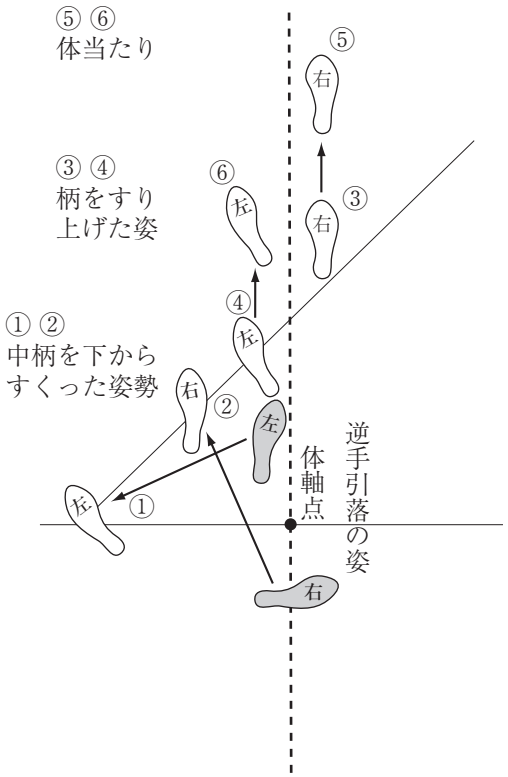
打　打たれる瞬間に左足から退く。

仕　残心を示す。

納　め　方　　三本目と同じ。

指　導　上　の　留　意　点

七本目「霞」
体当動作の原則



ク　八本目　太刀落

目的　中段に構えている「打」に対して、体をかわして頭部を打ち、ついで繰り付け、後退するところを返し突きし、さらに引落打する形である。

要領

仕　常の構えで相手を注視する。

打　八相に構えて間合に進み、中段に構える。

仕　右足を退きながら左手を逆にして杖先を握り、左足を退くと同時に杖尾を後ろから上に回し、右逆手に構えて太刀と合わせる。ついで右足を左足の斜め前に踏み出して体をかわしながら杖を両手いっぱいにとり、左足を踏み出し、逆手打ちで頭部を打つ。

打　左足から左横に開くと同時に両手を頭上にし、太刀の中央部で杖を受け止める。さらに太刀を頭上で回して、左足を踏み込むと同時に「仕」の右首を切る。

仕　杖先を左斜めいっぱいにとりながら腰を捻り、杖尾で斜め下から「打」の左小手をすくい、両足を組んだまま真半身となり、杖を頭上に上げて杖先を顔面につける。繰付の要領で右足を踏み出して、太刀を「打」の下腹部に繰り付ける。

打　右足から退き繰り付けられ、さらに左、右、左足と後退する。

仕　腰を捻って返し突の姿勢となり、左足から踏み出して水月を突き、さらに引落打で顔面を打つ。

打　打たれる瞬間に左足から１歩退く。

仕　残心を示す。

仕　　右足は左足のかかとまで退く。太刀との合わせ方は『霞』と同じ。逆手の構えから杖をいっぱいにとる時は、左手を引いてとり、右手を前に出さない。右足の踏み出しは、左足斜め前ほぼ30度とする。逆手打ちは、上から頭部を打ち、横面ではない。

打　　左足は左足横に開き前には出さない。また右足も少し退き間合をとる。剣先を大きく旋回させ、右足を軸に左足を出して右首を切る。太刀が首に届く時、左手は正中線の前にくる。左小手をとられる前に組手にならない。

仕　　右手を下に引かず、左手を左斜め上にとり腰を捻り、左小手をすくい杖先を顔面につける。

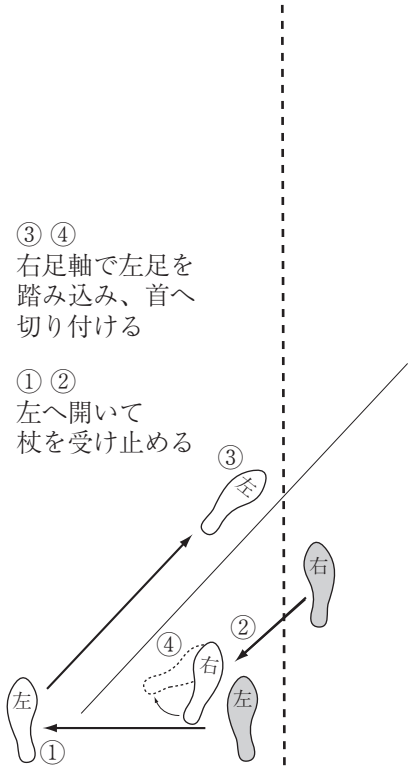
　繰り付ける時、右足を杖の方向に進め、「打」の左足の前に出ない。

解　　説

納　め　方　　三本目と同じ。

指　導　上　の　留　意　点

八本目「太刀落」
打太刀の受けと切り付け
の動作の原則



ケ　九本目　雷　打

目的　太刀で二の腕に切り付けてくる瞬間、水月を逆手突し、さらに左に体をかわし脾腹を突く形である。

要領

仕　常の構えから七本目と同じ要領で霞の構えとなる。
打　八相に構えて間合に進み、中段に構える。
仕　右足を左足に揃え、さらに左足を退いて杖を前に下ろし右逆手の構えとなり太刀に合わせる。
打　太刀を振りかぶりながら右足から踏み込み、左二の腕に切り付ける。
仕　右足から１歩踏み出すと同時に左手を頭上に杖を斜めにして杖先で水月を突く。
打　左足から１歩退きながら太刀を上段に振りかぶり、右足を踏み込んで右肩を切る。
仕　左手を下に、右手を頭上に杖を両手いっぱいにとりながら、左足を左斜め前に踏み出しつつ左手から杖を繰り出し、体を左にかわして真半身となり、杖先で右脾腹を突く。
打　右、左足と退きながら太刀を下ろし、正対し剣先を「仕」の左膝下に向ける。
仕　右手を下ろしながら左手を本手に持ち替え、顔面につけて残心を示す。

納　め　方

仕　四本目と同じ。　　打　三本目と同じ。

仕　太刀との合わせ方は『霞』と同じ。

打　一拍子で「仕」の左二の腕に切り付ける。届くように手を伸ばし、肘を下げない。
仕　「打」が切り付けてきた時、「打」の正面に真半身となって入り突く。突いてから頭上に上げてはならない。
打　すばやく退き、間を置かずに首筋から肩にかけて真っ直ぐに切る。
仕　早く体をかわさず、「打」が振りかぶって切ってきた時、左に体を捌き脾腹に向かって真半身となり突く。

打　両足が自由に動けるように残心を示し、重心と姿勢に気をつける。
（以下これに準ずる）

コ　十本目　正　眼

目的　「打」が柄に手をかけたところ、機先を制して水月を打ち、退くところの脾腹を突き、さらに水月を打つ形である。

要領

仕　常の構えで右足から間合に進む。

打　帯刀のまま右足から間合に進み、右足を前にしてやや半身となり太刀の柄に手をかける。

仕　右手を前に伸ばし顔面を攻めながら左手で杖尾をとり、右足を踏み出し本手打で水月を打つ。

打　腰を捻りながら、杖の下から右上方に太刀を抜きかける。

仕　腰を捻り右手を上にして杖を両手いっぱいにとり、左足を踏み出すと同時に左脾腹を逆手突きする。

打　右足から１歩大きく退きながら太刀を右斜め上に抜く。
さらに右足を踏み込み､左小手を袈裟に片手切りする。

仕　左手を手前に引くと同時に左足を右足に揃えて太刀を外して杖を八相に構え、右足を踏み出して水月を打つ。そのまま杖先を「打」の顔面につけ､残心を示す。

打　左足から退きながら正対し、剣先を「仕」の左膝下に向ける。

納　め　方　　三本目と同じ。

打　　帯刀した時は､左手親指を鍔にかけ､柄頭を正中線とし､両足を揃える。

仕　　水月を本手打ちした時、やや半身の構えとなる。

打　　「仕」に水月を打たれた時、原則として後ろに退かずに受ける。

仕　　正確な「逆手突　用意」の姿勢をとり、すばやく突き、後ろ足は横に向けず、やや半身の姿勢となる。突く前に足を出さない。

打　　太刀を抜く時、手首を捻って刃をかえさない。
　先に退いて逆手突きを待たず､突いてくる杖に合わせて､やや半身となりながら右足から大きく退き、杖を見切る。正しい間合で片手切りをすると同時に左手をそえ、剣先をいかしておく。切った姿勢は、やや半身となり横を向かない。

仕　　原則として、右足を動かさずに、左足を右足に揃える。水月を打つ時は、杖の先で打つ。胸部を打ってはならない。
　「杖の八相の構え」とは、左手の握りは水月の前あたりとし、右手は耳の上方とする。

サ　十一本目　乱　留

目的　中段に構えた太刀を逆手打し、正面に切り付けた太刀を巻き落とし、さらに体当たりをした後、引落打する形である。

要領

仕　常の構えから右足を退き、杖先を下にし、右後ろ体側に立てて真半身となり、杖を逆手で握ったまま正面を見る。

打　八相に構えて間合に進み、中段に構える。

仕　腰を捻りながら杖先を顔面につけ、左手を添え逆手のまま杖を前に出しながら右足を左足に揃え、さらに左足を退きながら右逆手に構えて太刀と合わせる。
ついで左手を引き杖を両手いっぱいにとり、太刀を逆手打すると同時に、左足を踏み出して顔面を攻める。

打　太刀を左脇下に打たれると同時に左足から退き、さらに右足から退いて八相に構える。

仕　右足から退いて右逆手引落に構える。

打　左、右足と踏み込んで左胴に切り付ける。

仕　右足を左足に揃えると同時に杖先を上に回し、右逆手打で顔面を制し、ついで左手を放し、左足を大きく退いて右手を右肩上に、左手で杖先を順に握り、太刀を打つ。

打　太刀を打たれて右足を左足にわずかにひきよせ、すかさず上から大きく巻き返して右足を踏み込み正面に切り付ける。

仕　左足から１歩退くと同時に巻落の要領で左手を左肩の高さに、杖先を右斜め上前方にとって太刀を受け、左に巻き落とすと同時に右足から１歩踏み出し顔面

仕　構えは『引提』と同じ。

仕　太刀との合わせ方は『引提』と同じ。

打　右足から退く時、一足一刀の間合に退き八相に構える。

仕　二足一刀の間合に退く。

仕　右足を左足のわずか前に出し、やや半身の体勢となり、右逆手打で制する。
右手の握りの位置を変えず、そのまま右肩上に上げ、左手は正中線上に置く。
太刀を打ち落とした杖は、自然に下まで落とす。

打　太刀を打たれた時、一瞬相手を注視し、「仕」の動きを見定め切り付ける。

を攻める。

打　巻き落とされて顔面を攻められ右足を退く。

仕　さらに右足から１歩顔面を攻める。

打　攻められて左足を退く。さらに右足から退きながら八相に構える。

仕　右手で杖の中央を握り、左足を右足に揃えながら左手を放して右手で横に持ち、左手は甲を前に右手と揃え、杖を体前に真横に構える。

打　右足を踏み込み正面に切り付ける。

仕　右足から踏み出すと同時に杖を頭上にとり、杖先で顔面を攻め、さらに右足から進め体当たりの要領で太刀を押し上げる。

打　右足を左足にわずかにひきよせ、太刀を横にして頭上にとる。

仕　左足を踏み出し体当たりする。

打　右足から３歩後退しながら八相に構える。

仕　体当たりした後、右足から退くと同時に、右手を上に杖をしごきながら右引落の構えとなる。

打　右足から踏み込み切り付けるように中段に構える。

仕　太刀を引落打ちすると同時に、右足から踏み出し「打」の顔面を攻める。

打　太刀を右後方に打ち落とされると同時に右足から退く。

仕　残心を示す。

納　め　方　　一本目と同じ。

仕　　左足を右足に揃える時、右足は踏み出さない。

仕　　顔面を攻める時、「打」の正面に真半身となって入る。

打　　３歩退く時、一足一刀の間合に退き、八相に構える。

仕　　二足一刀の間合に退きながら杖を両手いっぱいにとり本手に持ち替えて引落とす。

シ　十二本目　乱　合

目的　多くの技を総合し、連けいしてひとつの形としたものである。

要領

打　帯刀のまま右足から間合に進み、右足を前にしてやや半身となり太刀の柄に手をかける。

仕　常の構えで右足から進み、右足を前にして、右手を伸ばして杖先を「打」の顔面につけて機先を制し、左足を右足に揃えると同時に右手を上げながら左手を右手の下に順に持ち、杖尾を右脾腹につける。ついで右足を退きながら右手を頭上後ろにとり、右手を持ち替え、左手をわずかにすべらし真半身となる。

打　右足から１歩大きく退きながら太刀を右斜め上に抜く。

仕　右足から１歩退きながら右逆手引落の構えとなる。

打　左足を進め振りかぶる。

仕　左足から真っ直ぐ進むと同時に左手を伸ばし杖先で顔面を攻める。

打　右足を踏み込んで正面を切る。

仕　右足を左足の右斜め前に進め「打」の左斜め前に直角になるように後ろ向きに体をかわして杖を頭上にとり、繰付の要領で太刀の柄を下からすくい、そのまま杖先を上に回し、右足を軸にして体を捻ると同時に左足を前に出して「打」の下腹部に前から繰り付ける。

打　左足から１歩退きながら繰り付けられ、さらに左足から左横に１歩退く。

打　帯刀した時は、左手親指を鍔にかけ、柄頭を正中線とし、両足を揃える。

目を攻められた時、やや半身のまま太刀を身体に引き付ける。右肘は上げない。

仕　顔面を制した後、正面から脾腹につける。

杖を脾腹につける時、突き押さえ、杖先の力をゆるめないようにし、両手をほぼ肩幅とする。

打　やや半身となりながら右足から退く時、一足一刀の間合に退く。

仕　二足一刀の間合に退く。

打　「仕」を正確に切る間合に左足を進める。

仕　杖は右手で斜め下から突き出すように攻める。

打　右足はわずかに進めること。間合に留意する。

仕　繰り付けた時、左右の足は、同じ線とする。

打　繰り付けられた時、左右の足は同じ線となり、「仕」の両足と平行にする。左足から左に退く時、押さえられた太刀を抜くように退く。

仕　繰り付けたまま、右足から右方へわずかに進めて両足を揃える。

打　その場で太刀を左肩方向に振り返し、さらに右足を踏み込み、「仕」の右胴を切る。

仕　右足を１歩退いて真半身となり、左手から杖を繰り出し、両手を斜め前に張り出して右脾腹を突く。

打　右足から後ろに退きながら八相に構える。

仕　右足から１歩退き、右逆手引落の構えとなる。

打　左、右足、と踏み込み左胴に切り付ける。

仕　右足を左足に揃えると同時に杖先を上に回し、右逆手打で顔面を制し、ついで左手を放し、左足を大きく退いて右手を右肩上に、左手で杖先を順に握り、太刀を打つ。

打　太刀を打たれて右足を左足にわずかにひきよせ、すかさず上から大きく巻き返して右足を踏み込み正面に切り付ける。

仕　右手を杖先にずらし、頭上へ両手いっぱいにとり、右手を逆に持ち替えながら左手から杖を繰り出し左足から１歩踏み出し真半身となって、杖先で右脾腹を上方から突く。

打　右足から１歩退き、八相に構える。

仕　右足から１歩退くと同時に、右引落の構えとなり、ついで右足を踏み出して引落打で頭部を打つ。

打　左足を退きながら太刀を前額部に剣先を右斜め上にして鍔元で杖を受け止め､右足､右足と１歩づつ踏み込む。

仕　杖先で太刀を押さえたまま右足を左足にひきよせ、ついで左足から１歩退き、太刀を押さえる。

打　さらに左足を踏み込み、「仕」の胸部を横一文字に切る。

仕　　両足を揃えた時、左手は持ち替えず、左親指は内側のまま。

打　　「仕」が足を進める時、一瞬相手を注視し、「仕」の動きを見定めて、右足をわずかに進め切り付ける。

仕　　真半身となった時、杖を両手いっぱいにとる。

打　　右足から退く時、一足一刀の間合に退き八相に構える。

仕　　二足一刀の間合に退く。

仕　　右足を左足のわずか前に出し、やや半身の体勢となり、右逆手打で制する。

　右手の握りの位置を変えず、そのまま右肩上に上げ、左手は正中線上に置く。

　太刀を打ち落とした杖は、自然に下まで落とす。

打　　太刀を打たれた時、一瞬相手を注視し、「仕」の動きを見定め切り付ける。

仕　　右手を杖先にずらす時、左手は後ろに引かず前に出す。

打　　胸部を切った後、「仕」の身体を通り過ぎた所で太刀を止める。その時左手は体の中心に置く。身体も右横を向かずに、やや半身となり「仕」のほうを向く。

仕　右足を大きく１歩退き、真半身に向き、頭上で右手を杖先にずらしながら両手いっぱいにとると同時に、左足を右足にひきよせ太刀を外し、杖を下に下ろし、左足を踏み出して左脾腹を突く。

打　突かれる瞬間右足から１歩退き、八相に構える。

仕　右足から１歩退いて右逆手引落の構えとなる。

打　左、右足と踏み込んで正面に切り付ける。

仕　左足を左に開き、右足を左足の右斜め前に踏み出し、杖先で太刀の中柄をすくい、繰放の要領で右足を「打」の右外側に１歩踏み出して繰り放す。

打　繰り放されたら相手を注視したまま右、左、右足と退く。ついで腰を捻りながら右片手で杖を持つ右小手を切ると同時に左手を添え、さらに右足を１歩大きく踏み込み、咽喉を突く。

仕　右足を１歩退くと同時に、右手を上から後ろに回し、右引落の構えとなり、左足を退きながら杖を太刀と打ち合わせる。ついで右足を進めて顔面を攻め、退くところを、杖を大きく巻き返して左足を踏み出し顔面を攻める。

打　右、左、右足と退き八相に構えてから、右足を１歩踏み込んで右手親指を切る。

仕　杖先を顔面につけたまま、左足を右足の後に退き、両手を頭上に上げて上体を前にそらし、真半身となって太刀を外し、右足を踏み出して水月を突く。

打　左足から退き、太刀を逆八相から右足を踏み込み右胴に切り付ける。

仕　右足から１歩退くと同時に胴払打の要領で太刀を受け

仕　　杖を頭上に上げた時、杖先を打の顔面につける。杖を下に下ろしたとき、右手親指を内側に入れ、突き手となり真半身のまま腰の横にとる。

打　　突かれる瞬間、右足から１歩見切ってさがり、ついで右足から退いて八相となる。

仕　　「打」がさがり、八相となると同時に、二足一刀の間合に退く。

打　　「仕」に繰り放される前に手首を曲げない。繰り放されたら、右足を後ろに退き、左足をその右足の前に組むように退き、さらに右足を退く。
繰り放された太刀の刃先は後方に向け、剣先は斜め下に自然に下げる。斜め上から右片手で小手を切り、左手は体の前で添える。

仕　　「打」が小手を切るまで、先に動かない。引落とす時、真半身となりながら杖をいっぱいにとり本手に持ち替える。攻めてくる太刀に深く合わせず、中心をとる。

仕　　杖先を引くことなく体を弓なりにして、顔面を攻める。左手の握りは変えることなく頭上に上げ、下ろしながら水月を突く。

打　　水月を突かれた時、原則として後ろに退かずに受ける。

打　　剣先が下がらないように、腰を落として胴を切る。

仕　　太刀が切るまで先に動かない。

解　　説

止め、右手を上げて杖を両手いっぱいにとり、右本手打で顔面を打ちながら右足を踏み出す。

打　右足から大きく退き、八相となり、さらに右足を踏み込んで正面を切り付ける。

仕　杖先を左横にし、正面を切り付けてくる太刀を下から右横に張り、右足を左足に揃えて八相の構えとなる。

打　左に張られてやや半身となり、太刀を自然に下に下ろす。

仕　八相の構えから右足を踏み出し、右本手打で水月を打つ。そのまま杖先を「打」の顔面につけ､残心を示す。

打　左足から退きながら正対し、剣先を「仕」の左膝下に向ける。

納　め　方　　三本目と同じ。

追　記　1

1．昭和43年制定
1．昭和52年10月一部改正
1．昭和62年６月一部改正
1．平成15年４月改訂
1．平成20年６月一部修正
1．平成29年４月一部修正

指　導　上　の　留　意　点

仕　　右本手打の後、杖先は軽く床面につける。

打　　杖が攻めるまで動かない。

仕　　「打」が振りかぶると同時に杖先を左横に動かす。
そのままの姿勢で太刀を張り、八相の構えとなる。体を外してから張るのではない。

仕　　水月を打つ時は、杖の先で打つ。胸部を打ってはならない。

杖道審判・審査上の着眼点

財団法人　全日本剣道連盟

礼法……定められた礼法のとおり行っているか。

名　称	（打）	（仕）
一本目 着　杖	⑴正しい八相の構えから間合に入り水平まで切っているか。 ⑵正しく左上段に構えているか。	⑴右斜め後ろに体を捌いた姿勢はどうか。 ⑵杖を右斜め上から大きく回して「打」の左小手を打っているか。 ⑶正しい本手打で「打」の左小手を打っているか。
二本目 水　月	⑴「仕」の正面を正しく切っているか。 ⑵八相から十分間合をとって正しく中段に構えているか。	⑴体を右斜め前に捌き、左肩をやや後ろに引き正しく水月を突いているか。 ⑵正しく引落の構えになっているか。 ⑶引落打の強さはどうか。
三本目 引　提	⑴太刀先を等分に杖と合わせているか。 ⑵左上段から正しく正面を切っているか。 ⑶正しく繰り付けられているか。	⑴合わせた杖先は太刀と等分になっているか。 ⑵正しい繰付から正しく水月を突いているか。
四本目 斜　面	⑴正面を正しく水平まで切っているか。 ⑵間合を十分にとり正しい左上段になっているか。	⑴体を右斜め前に捌き、杖を４等分した位置に右手をずらし、正しく「打」のこめかみを杖先で打っているか。 ⑵正しく水月を突いているか。
五本目 左　貫	⑴正しく水月を突いているか。 ⑵太刀を打たれて退く場合、右、左、右足と退いているか。 ⑶八相、中段の構えは正しいか。	⑴突いてきた剣先を受け流す時、真半身になり適正な間合に退いているか。 ⑵太刀を打った時、右足が出ているか。 ⑶左足を右足に揃え、杖をいっぱいにとって大きく引き落と

名　称	（打）	（仕）
		しているか。
六本目 物　見	⑴「仕」の正面を水平まで切っているか。 ⑵正しい左上段になっているか。	⑴足の捌きはどうか。 ⑵杖を大きく回して小手を打っているか。 ⑶正しい返突をしているか。
七本目 霞	⑴二足一刀の間合から左、右足と出て正しく正面を切っているか。 ⑵体当をされて正しく退いているか。	⑴逆手打で打った時の姿勢と攻めはどうか。 ⑵正しい引落の構えと、正しい体当をしているか。
八本目 太刀落	⑴体を左横に正しく捌いて、杖を受けているか。 ⑵太刀を頭上で大きく回して首を切っているか。 ⑶繰り付けられてから正しく退いているか。	⑴体を捌き、正しい逆手打になっているか。 ⑵正しい繰付の姿勢になっているか。
九本目 雷　打	⑴正しく二の腕を切っているか。 ⑵左足から大きく退き肩から首にかけて切っているか。	⑴正しく水月を突いているか。 ⑵体を左斜め前に捌き、正しく脾腹を突いているか。
十本目 正　眼	⑴間合に入り右手で柄を握った姿勢はどうか。 ⑵正しい片手切りをしているか。	⑴間合に入り杖先で眼を攻め、正しく水月を打っているか。 ⑵逆手突で正しく「打」の脾腹を突いているか。 ⑶「打」の片手切りに対し、小手を外し、正しい八相の構えから水月を打っているか。
十一本目 乱　留	⑴正しく胴を切っているか。 ⑵右足をわずかにひきよせ、巻き返して正面を切っているか。	⑴逆手打で打った時の左手の位置はどうか。 ⑵頭上にとった時の杖先は正しく「打」の顔面を攻めているか。

名　称	（打）	（仕）
十二本目 乱　合	⑴右斜め上に太刀を抜いた姿勢はどうか。 ⑵正しく胴を切っているか。 ⑶左足を引き前額部で正しく杖を受けているか。 ⑷正しく攻めて胸部を切っているか。 ⑸繰り放され、右、左、右足と退るときの姿勢と目付けはどうか。 ⑹「仕」の右小手を片手切りをしているか、また１歩踏み込み正しい突きをしているか。 ⑺正しく胴を切っているか。 （打（太刀）に対する補足） １　腕・手首をやわらかく。 ２　刃筋のとおった正しい切り方。	⑴引落の構えから左、右足と十分相手をけん制し、手元に入っているか。 ⑵脾腹を正しく突いているか。 ⑶右足を１歩前に出し、すかさず頭部を打っているか。 ⑷「打」の攻めに対して正しい退き方をしているか。 ⑸正しい繰放をしているか。 ⑹胴払いで受けた姿勢は正しいか。

――制作に関係した人々――

平成13・14年度　杖道委員会

委　員　加藤　勝幸　　神之田常盛　　波止　成徳　　半田利一郎
　　松井　健二　　矢野庄一郎
幹　事　松村　重紘

平成19・20年度　審議員　波止　成徳
杖道委員会

委員長　田原　弘徳
委　員　加藤　勝幸　　黒郷　源慈　　椎屋　光男　　松井　健二
　　松村　重紘　　矢野庄一郎
委員兼幹事　冨永　彰三

平成27・28年度　審議員　古川　瞬也
杖道委員会

委員長　荒井　　洋
委　員　大竹　俊行　　黒郷　源慈　　神代　孝一　　釣賀　敏郎
　　村上　直隆　　安丸　　進
委員兼幹事　森本　訓史

（五十音順）

全日本剣道連盟杖道（解説）

平成15年４月１日　第１版　第１刷　発行
平成15年７月１日　　第２刷　発行
平成20年６月１日　第２版　第１刷　発行
平成29年４月１日　第３版　第１刷　発行

発　行　者　全日本剣道連盟

九段事務所
〒102-0074
東京都千代田区九段南2-3-14　靖国九段南ビル2階
電話 03-3234-6271(代表) FAX 03-3234-6007

北の丸事務所
〒102-0091
東京都千代田区北の丸公園2-3　日本武道館内
電話 03-3211-5804(代表) FAX 03-3211-5807

印刷・製本　株式会社ドットケイズ

ⓒAll Japan Kendo Federation 2017 Printed in Japan